ジェニー・ゴット・ハー・ソード

Jenny Got Her Sword.

ダークサイド・オブ・マイ・マインド　X1

The Darkside of my Mind. -X1-

草案　未完

久々に熟睡できた気がする。こんなにすっきりした目覚めはいつ以来だろう。村を出てからは人の目を気にする生活で、熟睡できなかった。そう考えると、こんなに気持ちいい目覚めはまだ村にいた子供の時分以来かもしれない。

村を出たのはずいぶん前だ。商人のもとに売られ、妾として囲われた。そしてその後、闘士に受け渡された。いい思い出が全くない訳ではないが、性奴隷として過ごす日々に安らぎはなかった。

朝であろうと夜中であろうとこちらの都合に関係なく性行為を強いられる。呼び出しに少しでも遅れれば暴力がふるわれた。声がかかれば即時に対応しなくてはいけない生活は寝ているときでさえ緊張を強いられていた。

それなのに、今日に限って緊張もなく心から休めていたのだ。満ち足りた目覚めの中でフレイヤはゆっくりと目を開けた。

輝くほどの白いふかふかの寝具、頭が埋もれる枕。いつもとは違う寝床だ。

今の主人の闘士は家を三つ所有している。主に使っているのは王都のはずれにある小さな訓練場が併設された屋敷で、次いで使用が多いのはコロセウムがある街、スロコサの家だ。そのほかにも湖のほとりの村に小屋のような粗末な家がある。だが、そこは滅多に使われない。フレイヤは何度か連れていかれたことがあるが、そこへ行くと闘士はいつも不機嫌になる。おそらく、忘れられない嫌な思い出があるのだろう。独り言が多くなり、いつも当たり散らしている。

そこに行っても何をする訳ではない。だから、当たられる側からすれば行かなければいいのにと思うのだが、毎年一度は必ず訪れ、フレイヤに暴力をふるうのだった。

湖畔の小屋を除き、闘士の使うものは上等な品が用意されている。寝具も王への献上品としても使えるほどの上物だ。ただ、それを使えるのは主人である闘士だけだった。フレイヤや住み込みの飯炊き婆には固い木の寝床があてがわれているだけだ。

夜中に呼び出され、ことが終わった後に果ててそのまま寝てしまうことがある。そのときの柔らかさは布を敷いただけの木の寝床とは比べ物にならない。だが、今ここで寝ているこの寝具も闘士の寝具とは比べ物にならない。柔らかい闘士の寝床よりもさらに上を行くふかふか感だ。

献上品より上質の寝具。ここはどこなのだろう。

今いる部屋は見たことのない部屋だ。調度品はシンプルで最低限のものしかない。壁に向かって押し付けられた小さめの机。その机と一体となってい

る三つの引き出しのチェスト。机の前の壁には曇りの全くない鏡。机の左側の壁は折戸開きなどという珍しい扉が二つあるが、あんなに広い扉はどこにつながっているのだろう。
家具の少なさから見ると、客間として使われる部屋なのだろう。普通の家なら、専用の客間などという贅沢な空間はない。客が泊まるときは居間や収納部屋にスペースをつくるだけだ。客間専用の部屋と最上級の寝具。お屋敷であることは間違いないが、普通のお屋敷ではここまでのものはないだろう。とすると、ここは王城の中なのかもしれない。
フレイヤの仕えていた闘士は競技会の個人戦で、何年も無敗を続けている。今回の闘技会で優勝すれば王城に招かれると自慢していた。きっとここは彼に連れられてやってきた王城の客間だ。
フレイヤは心地よいまどろみの中でそんなことを考えていた。

ドンドンドンドン。扉を叩く音でフレイヤは再び目を覚ました。一度は眠りから覚めたのだが、あまりの気持ちよさに二度寝してしまったようだ。フレイヤは慌てて飛び起きた。ノックの主は闘士だろう。反応の遅れは暴力となって返ってくる。
「た、ただいま参ります」
ノックが聞こえた扉は机の横の通路のような細い廊下の先にある。フレイヤはまず、大声で返事を返し、走った。
「遅くなってすみませんでした」
扉を開けながら頭をさげ、腹筋に力を入れた。
闘士は決してフレイヤの顔を殴らなかった。殴られるのは腹か背中か尻だ。
「お前の商品価値はその顔だからな。顔を傷つけて価値を落とすことはしねえよ」
そう言って腹や尻を殴りつけるのだ。
闘技会で優勝するほどの実力の持ち主からのパンチは重い。ドシンという衝撃がある。まともに受ければ体がはじけ飛んでしまう。だから服に隠されて見えないところはいつも青あざだらけだった。パンチを避けることは許されない。そもそも一流の闘士のパンチを避けられるほどの俊敏性をフレイヤは持っていない。だが、痛いのは嫌だ。だから少しでも衝撃を弱くするため、腹に力を入れて身構えたのだ。
しかし、パンチはいつまでたってもやってこない。今日の闘士は機嫌がいいのだろうか。フレイヤは恐る恐る顔を上げた。
するとそこには不思議そうな面持ちでフレイヤを見下ろす、色黒で片目の大女が立っているだけだった。
「お、おはよう。よく眠れた、みたいだね」
大女は寝ぐせのついた頭を見下ろして笑うのだった。

「あの、ここはどこでしょう」
あらわれたのが闘士でなく、見知らぬ大女だったことに意表を突かれた。目の前の大女をしっかり見ると、全く知らない顔ではなく、どこかで見た記憶

がある。
「ここはどこですか。それと、どちら様でしょうか」
「私は美月。昨日のこと、覚えてないんだね」
そう言われて思い起こしてみるが、確かに記憶が曖昧になっている。スロコサの闘技場。そこで何かあった筈なのだ。だが、何も思い出せない。
「まあいいよ。おいおい思い出せば。起きたんなら着替えて私のとこ来て。これからのこと話すから。白石さん、ぴぃな、着替え手伝ってやりな」
ミヅキが後ろを振り返ると、そこには大女に隠れるように侍女服を着た二人が立っていた。
「はい、かしこまりました」
スカート丈がやたらと短いほうの女がそう答えると、ミヅキはそこで役割を終えたかのように、フレイヤを見ることもなく立ち去っていった。残されたフレイヤは侍女たちに促され、三人で元の部屋の中へ入っていったのだった。

何が起きているのか判らないまま、フレイヤはすべての着衣を脱がされていった。いくら侍女が同性とはいえ、人前で裸になるのは抵抗があったのだが、手際よく動く二人にあがらう間もなく、気付いたときにはすでに全裸になっていたのだ。
「じゃあ、シャワー浴びてね」
スカート丈の長いほう、たしかピイナという名の侍女が肩を叩く。だけれども、フレイヤには『シャワ』が判らない。『浴びる』であれば日光浴か水浴びだろう。部屋の中で日光浴ということはない。でも、水浴びの支度もこの部屋にはない。ピイナの顔色をうかがいつつ、改めて部屋の中を見回すが、そこには机と寝具があるだけだ。
「あの、『シャワ』はどこにあるのでしょう」
恐る恐る尋ねると、ピイナは「こっちこっち」と言いながら廊下に入り途中の扉を開けた。
「ここだから。終わったら声かけてね」そう言って、フレイヤを小部屋に押し込み、扉を閉めるのだった。
狭い閉鎖空間で一人になったフレイヤは『シャワ』を探した。そこにあるのは炊事場風の台と低い楕円の椅子。そしてカーテンだ。
炊事場に、かまどはない。小さな台、その横の小さなシンク。シンクの脇には銀の突起があるだけだ。
似たような突起はカーテンの奥の壁にもあったが、小部屋にあるのはそれだけだ。
椅子をよく見ると座面が持ち上げられるようになっていた。そのふたを開けると、椅子の中は空洞になっていて、底に少量の水が溜まっている。でもその量はコップ二杯ほどだ。これだけの水で水浴びをしなければならないのか。周りには手桶もない。椅子の底はくぼんでいて両手を入れることはできない。片手で水をすくい、体になでつけていくが、すぐに水はなくなってしまう。

ここはどこなのだろう。何故こんなみじめに全裸で水をすくっているのだろう。フレイヤの目に涙があふれ出てきた。
トントン。扉を叩く音がする。
「開けるよ。掃除で雑巾使うから水道使わせて」
ピイナの声と同時に小部屋の扉が開けられた。泣き顔を見られたくないフレイヤは、下を向いて涙をぬぐった。
「えっ、何してるの」
泣きながら床に座り込んで、椅子のくぼみに手を突っ込んでいるフレイヤを見て、ピイナは目を丸くしていた。

フレイヤの使っていたものは『シャワ』ではなく便器だったようだ。『シャワ』は取っ手をひねると壁の突起から湯水が出てくる魔道具のことだった。実演を見ても今一つ使い方が判らないフレイヤに対し、ピイナは自らも裸になり、フレイヤにシャワを浴びせてくれた。その最中、寝起きの尿意を催したフレイヤに便器の使い方も教えてくれた。実際に排尿する場面を見られるのは恥ずかしかったが、使い方が判らなかったので仕方がない。
その後、花の香りがする粘った液体を体と髪にこすりつけられ、シャワから出るぬるま湯で流す。それだけのことだが、それだけで、フレイヤは穏やかな気分になっていった。

「ここはどこなのですか」
鏡の前で椅子に座り、スカート丈の短い侍女に髪をとかされながら、フレイヤは何度目かの同じ問いを口にした。
「それは後ほど美月様に伺ってください」
侍女はにっこり笑うが、問いには答えてくれない。温風がでる魔道具を使って、フレイヤの濡れた髪を乾かすだけだ。もしかしたらこの侍女もここがどこだか知らないのかもしれない。一緒にシャワを浴びたピイナも裸で立ったまま、同じ魔道具を使って、自分の髪に風をあてているだけで、答えてくれない。
「シャワーも知らなければ、トイレも知らない。ここがどこなのかさえ判らない。あなたはこの国の人なんだよね。ねえ、この国の人はみんなあなたみたいに何にも知らないの」
確かにフレイヤはシャワを知らなかった。ドライヤというこの温風魔道具も知らない。だがそれはフレイヤが知らないだけだ。この国には多くの人が住んでいる。その中には魔道具に詳しい人もいるだろう。山や森の奥で閉鎖的に暮らしている亜人種たちには常識の道具かもしれない。そもそも、この国を代表して答える権利などフレイヤは持っていない。
よりよい返答を考えているとき、ふとある疑問にたどり着いてしまった。
ピイナは「この国の人」という言い方をした。ということはピイナは「この国の人」ではない。この国は広い。スロコサは三つの自治領の境界線が接するところに位置するが、「国」とすると、三つの自治領とも同じ国だ。隣の国はここから何日も何十日もはなれたところにある。異国人など滅多にい

ない。見かけてことがない訳ではないが、そうそうあることでもない。
「ピイナやミヅキは異国の人なのですね」
そう聞いた瞬間、すべてが凍り付いた。
自分の髪をとかしていたピイナの手も、フレイヤの髪に温風をあてている侍女の手も、突如として凍ったように動きを止めていた。
「美月様を呼び捨てにする設定はあなたにはありません。美月様のことをどのようにお呼びすればいいかは、この後、美月様が教えてくれるでしょう。それまでは軽々しく美月様の名を口にしないでください」
侍女は『設定』と言った。人の名を呼ぶのに設定が必要なのか。いや、何かと言い間違えたのだろう。スカート丈の短い女は鏡越しに非難の目でにらみつけいる。どうやら怒っているようだ。その怒りで何かと言葉が入れ替わってしまったのかもしれない。
ミヅキは侍女たちの主人のはずだ。その名を口にすることで主人を侮辱されたと受け取ったのかもしれない。名前を呼ぶくらいなんでもないと思うのだが、異国人の風習ではそうではないのだろう。
「ごめんなさい。気を付けます」
その言葉で満足したのか、それとも感情を押し殺したのか、スカート丈の短い侍女は無言でフレイヤの髪のセットを再開した。
「ああ、質問は全部、この後、美月様にしてね。私たちはあなたの準備を言いつかってるだけで、どこまで話していいか聞いてないから、何も答えられないんだよ」
冷えてしまった場の雰囲気を変えようとしたのだろう、ピイナが軽い口調で言ってきた。
それにしても、この侍女たちは会話もままならないのか。ミヅキはそれほど怖い存在なのか。そう考えたとき、フレイヤの頭の中に、何故か血まみれで鬼の形相のミヅキの姿が浮かんできた。

フレイヤはピイナたちと同じ侍女服を着せられてミヅキの執務室に来ていた。侍女服を見せられたとき、スカート丈が短かったら嫌だなと思ったのだが、幸いなことに用意されていたのはピイナと同じ膝下丈の服だった。
執務室は大きな執務机が一つ。その前に高級そうな応接セットが一つ。それだけしかなかった。無駄なものが一切ないシンプルなつくりだ。
ミヅキはその机に向かって忙しく事務作業をしている。ミヅキの右横では小さなインプが書類を覗き込むように見ている。インプは書類の不備を見つけるときつい口調でミヅキを叱り飛ばした。その様子からすると、インプはミヅキの上司なのかもしれない。とすれば、侍女たちの主人はミヅキではなくこのインプなのだろうか。
ミヅキの名を口にしただけで、あれほどの注意を受けた。それより上の立場の者にはどう接するのがいいのか。『接客』は不得手ではないが、彼らは異国人や亜人だ。フレイヤの常識では図ってはいけないことは先ほど身に沁みた。「しばらく待って」とミヅキに言われ壁際に立っていたフレイヤは、インプと目を合わせないよう、ずっと床だけを見ていた。

部屋で立たされてどのくらいたっただろう。ピイナもスカート丈の短い女もすでにいなくなり、所在なしに立っているのはフレイヤだけになっていた。いつまで待たされるのか気になって来たころ、奥の扉が開いて、スカート丈の短い侍女がティーセットを携えて入ってきた。その後ろに、ピイナともう一人、侍女が続いている。

と、突如「うううう」と声を発しながらミヅキが両手を上にあげ伸びをした。そして机上の書類をまとめ、後ろを見ずに背後に控える見知らぬ侍女に向かって突き出した。すると侍女は当然のようにそれを受け取り、再び奥の扉の中に戻っていった。

「お茶をお持ちしました」

スカート丈の短い女がティーカップを書類のなくなった執務机に置く。

「あ、応接セットにして。お茶がてらそこの美人さんの面接するから」

「かしこまりました」

ミヅキが立ち上がると、ティーカップが下げられ、ただちに応接セットに配膳されなおされた。

「ねえ、あなたも飲むでしょ」

ミヅキはフレイヤを見ることなく、ドカッと三人掛けのソファーに腰を下ろした。

「ハイ」

そう答えたつもりだったが、いきなりのことで声がかすれてしまった。そのため侍女の入れるお茶に気を取られていたミヅキには聞こえなかったようだ。

「飲むの、飲まないの。ま、どっちでもいいから、そこに座って」

そう言って、あごでミヅキの向かいの一人掛けのソファーを示すが、ソファーの右横に移動してきたインプに「あの女は返事していましたっ。聞こえなかったのはご自分の注意が足りなかったからですっ」と叱られていた。

「あ、そ。それは悪かったわね。じゃ、白石さん。彼女の分のお茶もね。美人さんはさっさか座って」

ミヅキはインプに叱られても身にこたえないようだ。再度、あごでソファーを示す。シライシサンと呼ばれたスカート丈の短い女はちらりと非難の眼差しでフレイヤを見るが、黙ったまま、もうお茶のセットをもう一つテーブルの上に置いていった。

「じゃあ、これからフレイヤの面談を始めるよ。コール、美雪。コール、ロデムー」

空間魔法の呪文のように『コール』を唱えると、それとほぼ同時に、白い大女とすらっとした青年が部屋の中に入ってきた。白い女はすかさずミヅキの左横に移動し、青年はインプと並ぶように立った。

「早く座ってください。どちらのソファーでも構いません」

二つのカップにお茶を入れ終わったシライシサンがフレイヤのところまで来てボソッとつぶやく。その言い方にやや冷ややかなものを感じ、フレイヤは慌ててミヅキの前にある二つのソファー右側に座った。

ミヅキはそれをじっと見ている。ミヅキの横の白い女もインプも容姿端麗の青年もフレイヤを見ている。振り返ると、ピイナもシライシサンも、いつの間に戻ってきたのか、もう一人の侍女も背後からフレイヤを見ていた。

「私は美月。ここがどこだか思い出した？」

フレイヤは改めて部屋にいる者たちを見まわした。この場所の記憶は全くない。侍女たち、白い女、インプ、青年。誰も心当たりはない。ミヅキだけは何となく見た記憶がある。

「判りません。思い出せません」

そう答えると、ミヅキは鼻を鳴らした。

「私は美月。全く記憶にない？」

何故ミヅキは会話の最初に必ず名乗るのだろう。それも異国の風習なのだろうか。

「はい。ここがどこか判りません。皆さんの顔も見覚えがありません。ただ、ミ、あなた様はなんとなく、どこかで見た感じがします」

ふんっ。ミヅキが再び鼻を鳴らした。

ミヅキの名前を口にすると、ピイナとシライシサンは不機嫌になる。軽々しく口にするなとも言われた。言いかけた瞬間そのことを思い出し、呼び方を変えたのだが、それでも不満なのだろうか。

「私は美月。あなたの名前は？　私が何回名乗っても、自分の名前を言わないのは、自分の名前が判らないから？　それとも私を莫迦にしているの？」

そうか、ミヅキは名乗ってほしくて「私は美月」を繰り返していたのか。

闘士に連れられて出席した上流階級の集まりでは、まず紹介から始まった。この人は誰それ、私は誰それ。顔を知っている人でも、以前に紹介されたことがなければ、必ず名を名乗る。それが決まりだった。おそらくミヅキもそういう上流階級の人なのだろう。

「失礼しました、私はフレイヤです。私のことを知っているようでしたので、すでにどなたかに紹介されたのかとおもい、名乗りませんでした。決して莫迦にした訳ではありません」

「そう。自分が誰だか思い出せない訳じゃないのね」

ミヅキはそう言って、お茶を一口飲むとフレイヤにも勧めてくる。白地にピンクの花柄の美しいティーカップ。薄手のつくりになっていて、力を入れたら壊れてしまいそうだ。

そのカップをミヅキはぞんざいに扱っている。見ているほうが、割れてしまわないかとヒヤヒヤしてしまうほどだ。

お茶をすすめられたフレイヤは両手で包み込むように丁寧にカップを持ち、口を近づける。カップに唇が触れたとき、お茶の香りが鼻孔をくすぐった。それは今までに嗅いだことのないかぐわしい香りだった。そして、赤茶色の液体を少量口に含んだとき、その香りは口腔から鼻孔、さらには脳へと広がっていった。

「最後に覚えているのは何」

お茶に見とれていたフレイヤはピクッとしてミヅキに向き直った。

「え、ええと。スロコサの闘技場でストング様が闘技会に出場されていま

す。私はストング様と共に競技場にいました。ここはスロコサですか」
最後の記憶。それは闘技場だ。闘士は例年通り順調に勝ち進み、闘技会最終戦の個人戦決勝に出るはずだった。出るはずだが、出た記憶はない。おそらく決勝直前か、直後に何かがあり、それが原因で記憶を失ってしまったのだろう。
「闘技場が最終の記憶なのね。そこで何があったか覚えてる？」
「いえ、思い出せません」
「もう一度確認するよ。あなたの名前は？」
「フレイヤです」
「仕事は？」
フレイヤは闘士の性奴隷だ。いつもストングの側に控え、闘士が望んだときはいつでもどこでも性奉仕を行うのが仕事だ。闘士の要求は時と場所を選ばない。昼間だろうと真夜中だろうと、闘技場の控室だろうと、たとえ街中であろうと。
通りを歩いているとき、いきなり路地に連れ込まれ、突き立てられたことも一度や二度ではない。ここでこうしている間にも呼び出しを受け奉仕を要求されるかもしれないのだ。そして即座にその要求に応じなければ、闘士は怒り狂い、フレイヤは半殺しの目にあうだろう。
「あの、ストング様はどちらにいらっしゃいますか。ストング様は私がこちらにいることをご存知でしょうか」
フンッ。ミヅキの鼻が鳴る。その直後だった。
「美月様はあなたの仕事は何かと聞いていますっ。すぐに答えなさいっ。今までこの部屋にいて美月様が忙しい身であることが判らないのですかっ。その忙しい美月様の時間をあなたのくだらない質問で奪うのですかっ」
インプから厳しい言葉が浴びせられる。フレイヤはそれだけで委縮してしまう。
「えっ。あ、あの。私の仕事は、え。あの。ストング様の。その。身の、そう、身の周りのお世話をすることです。はい、お世話をしています」
この場で、自ら性奴隷だとは言いたくない。やっていることは身のお世話と言っていいだろう。そう言っても嘘にはならないはずだ。
「なるほど『身の』お世話ね。ストングの『身の』お世話って言ったけど、それはあのゴロツキ相手にしかできないの。他の人の『身の』お世話もできるよね」
ミヅキは『身の』を不自然に強調する。フレイヤがストングの性奴隷であることは、知っている人は知っていた。ストングはフレイヤをどこにでも連れていった。常に一緒にいるので、さほど親しくない人たちはフレイヤのことをストングの妻か恋人と思っているかもしれない。でもフレイヤは王都の商人からストングに譲られた貢物だ。
子供のころに商人の妾として親に売られ、それから愛人生活をしていた。ストングが闘士として頭角を現してきたころ、商人のもとを訪れたストングに見初められた。そして、トラブル時はその解決に手を貸すという条件で、フレイヤを要求したのだ。

それがもとで、最強闘士の後ろ盾を得たその商会が羽振りを利かすことになり、王都の商人たちは多くがフレイヤがストングの性奴隷であることを知っていた。さらにストングもそれを隠そうとはしなかったので、商人でなくともストングと幾度か話す機会があった者にも周知の事実であった。おそらくミヅキもその中の一人なのだろう。フレイヤがストングに仕える前のことまで知っていて、こういう聞き方をしてくるのだ。

「ストング専用ではなく、自分の愛人になれ」そう言いよる年寄りは何人もいた。ミヅキは自分のではなく懇意の者の愛人でもにしたいのだろう。

「ストング様はそれを許してくれないでしょう」

ストングは物を扱うようにフレイヤを扱っていた。だが、それはストングがフレイヤを軽く見ていることにはつながらない。ストングはストングなりの好意を持っているはずだ。好意がなければ、フレイヤを欲することはなかっただろうし、興味がなくなれば、簡単にフレイヤは殺されていただろう。少しでも好意があるものをストングは他の者に渡したりはしない。

「ううむ。そういうことを聞きたいんじゃないんだけど。じゃあ、聞き方を変えるよ。あなたは何ができるの」

『何ができる』とはどういうことだろう。これがしたい、あれがしたいと思ったところで

ストングがうなづいてくれるはずがない。性奴隷でいる限り、ストングの性処理をする以外のことなどできるはずがないのだ。

「ストング様のそばにいる以外、ストング様は許してくれません」

グルル。ミヅキが唸る。低いその唸り声はまるで獣が発しているようだ。

「ストングの居場所を知りたがっていたよね。教えてあげる。ストングはあなたのお腹の中。あなたがどこにいるのかあのゴロツキは知らない。今後永久に知ることはない。判った？」

『お腹の中』とはどういうことなのか。永久に知ることはないというのはどういうことなのか。おそらく『お腹の中』は『あなたの心の中にいる』だろう。異国人は心の中をお腹の中と表現するのかもしれない。そして、きっとすでに亡くなっているから『永久に知ることはない』のだ。

「ストング様は遥かなる高みに昇られたのですか」

「遥かなる？　それが『おっちんだ』って意味ならその通り。きれいにくたばってこの世にはいないよ。でも、フレイヤもその場にいて見てるはずだけど、思い出せない？」

「憶えてないです」

「そっか。思い出さなくてもいいから忘れないでね。そのときのこと。けっこう大事なことだから」

思い出せない出来事を忘れないようにするのは無理だ。そもそも何があったか知らないのだから、憶えておける訳がない。だが、そう答えてしまえばインプは不機嫌になるだろう。

「はい、努力します」

フレイヤにはそう答えるしかなかった。

「で、元の質問に戻るよ。あなたは何ができるの」

ストングの枷がないとして、フレイヤには何ができるのか。今までは闘士の性処理をしていた。それ以外はしていない。炊事家事洗濯などの日用雑事はそれ用の下女が別にいた。下女はしょっちゅう入れ替わっていたが、間が空いたことはない。だから、フレイヤがそれら雑事をしたことはなかった。やれと言われればできるだろうが、好きこのんでやりたいとは思わない。

そこでハタと気が付いた。フレイヤは商人から闘士に与えられた奴隷だ。ストングが死んだのなら自由の身だ。少なくとも商人の愛人の戻るだけだ。こんなところで問い詰められる謂れはない。やっとストングの目を気にしたり、おびえて過ごさなくてもいいようになったのだ。商人に身柄を渡される前にここから抜け出して自由になる。そして、やりたいことをやるのだ。

「ストング様はお亡くなりになったのですね。ストング様から解放していただきありがとうございます。このお礼はいつかきっといたします。では、私はこれで失礼させていただきます」

口早に告げて、ソファーから立ち上がる。相手が反応する前にけむに巻いて外に出のだ。シライシサンがあきれ顔で見ているがそれを気にする時間はない。

「私の着ていた服と荷物はどこでしょう。案内してください」

侍女は命令されれば従う生き物だ。フレイヤの命令にも従ってしまうかもしれないと期待したのだが、シライシサンは動こうとしない。

「座れ。そして私が『いい』というまで口をきくな」

ミヅキが低い声で唸る。その有無をも言わせぬ圧力にフレイヤは思わず再びソファーに腰をおろしてしまった。

「状況が判ってないようだね。ロデムー、説明してやって」

ロデムーと呼ばれたイケメンは「かしこまったのであーる」と言いながらどこからか一枚の紙を取り出した。

「マニリンド商会の作った契約書であーる。お前の所有権はストングから美月様に移ったという証明であーる。確認すべし」

フレイヤが差し出された紙を受け取る。そこにはフレイヤの元の持ち主の商人が持っているマニリンド商会の印章と奴隷譲渡の契約文章、そしてその内容が絵文字で書かれていた。

絵文字は、ストングの顔とミヅキの顔が描かれ、その間にフレイヤの顔、ストングからミヅキへの移動を示す矢印となっていた。そして、そのストングの上に大きくつけられたバツの印がストングの死を際立たせていた。

フレイヤはある程度の読み書きはできる。書くことはできないし、難しい文章まで読めないが、このようにイラスト付きであれば、この契約書が正式な譲渡の契約書であることは理解できる。

フレイヤが理解と疑問を口にしようとしたとき、ロデムーがすかさずそれを遮った。

「美月様はまだ発言を許可していないのであーる。口をつぐむべし」

「判った？　あなたの所有権はこの私にあるから。あなたに限らずストングが所持所有していたものは今やすべて私のものだから。近いうちにすべての棲み家に案内してもらうよ。でもその前にあなたにはやってもらうこ

とがある。筋肉莫迦は奴隷のしつけもできなかったようだからね。私のものになった以上、下品で礼儀知らずな奴隷を人前に出す訳にはいかない。だからまず徹底的にしつけを仕込むよ。でもね、私はクズにタダ飯を食わせるほどやさしくないからね。飯の分はしっかり働いてもらう。だから聞いたんだよ。あなたは何ができるのって」

「ま、待ってください。判りま…ボゴッ」

フレイヤから言葉が発せられたとき、突如ロデムーの腕が伸び、その先端がフレイヤの口の中にねじ込まれた。ロデムーの位置は変わっていない。単に右腕だけが伸び手首から先が口の中にあるだけだ。

口の中の手は、気道をふさぐようにねじ込まれている。そのため、悲鳴をあげることもできない。それどころか呼吸すらできなかった。

喉を閉められたら、鼻からの呼吸もできないんだ。パニックになりながらも、頭の一部ではそんなことを冷静に考えていた。

「申し訳ないのであーる。説明を任されたのに理解させることができなかったのであーる。謝罪するのであーる」

「ジェスター、ロデムー。二分あげる。この女に自分が置かれている状況を説明してやって。殺さなければ何をしてもいいから」

「かしこまりましたっ」

「判ったのであーる。次は失敗しないのであーる」

インプとゴム腕のイケメンは仰々しくうなづいた。

ロデムーの腕が引き抜かれると同時にインプによって口にハンカチを押し込まれた。気道をふさぐものが布に変わったことによって呼吸は確保できた。だが、逆に息ができることによってゴホゴホとむせぶ結果になってしまった。フレイヤが苦しんでいるとインプによって頭をテーブルに押し付けられた。

「口から音を発するのはやめなさいっ。命じられたので残念ながら殺しませんがっ、口から音を発すればそれ以外のことは何でもしますっ。理解したならただうなづきなさいっ」

そう言いながらも小柄なインプとは思えないほどの力で頭をテーブルに押しつづける。

フレイヤの頭の中では頭蓋骨がきしむ音が響いている。

「理解したのですかっ。してないのですかっ」

慌ててうなづいて見せるが頭を動かしたことにより、テーブルとの間で皮膚がよじれた。あまりの痛さで声を上げそうになるが、音を発することを禁じられたフレイヤは慌てて悲鳴を飲み込んだ。

「お前は美月様の所有物となったのであーる。美月様の言葉は絶対と知るべし。生かすも殺すも、ここにとどめるも追放するも、すべて美月様の心ひとつであーる。そのこと、常に心すべし。理解したらうなづくべし」

フレイヤは痛みに堪えてうなづいた。すると、頭への圧力がなくなった。

「これからは自分が生きているとは思わないことですっ。お前は単に生かされているだけですっ。それを忘れないよう心と体に刻み込みますっ」

インプはそう告げると懐からナイフを取り出した。ロデムーにはその意味

が判ったのだろう。フレイヤの背後に周りソファーから立たせ羽交い絞めにする。厚い胸板が密着し、顔を肩に乗せてくっつける。背後からの手は両脇から挟み付けるようにフレイヤの胸を圧迫した。

「床の上に座るべし。そして腕をテーブルの上に置くべし」

耳元で愛をささやくように告げる。平時であれば平然とあしらうか逆に篭絡してしまうかしていただろう。だが、ナイフを前にしたフレイヤはただ従うことだけしかできなかった。

「美月様っ、しばし耳を閉じてくださいっ」

テーブルの上に置かれた腕をインプが横から押さえつける。ミヅキはフンッと鼻を鳴らして、ゆっくりとお茶を飲み始めた。

「自分の立場を忘れたときどうなるか体に教えますっ」

ザクッ。

ナイフがフレイヤの右手首を切断する。とてもよく切れるナイフだ。まるで根菜を切るように、骨ごとスパッと切断された。

あまりの見事な切れ味に状況の理解が追い付かない。きれいな切断面をただ見ていた。やがて、それが自分の手首だと理解したとき、フレイヤは悲鳴にならない悲鳴をあげていた。

痛みを感じたとき、恐怖におびえたとき、人は悲鳴をあげる。だが、その痛みや恐怖の衝撃があまりにも大きすぎるとき、悲鳴は声にならない。息をすること忘れ、ただ目を丸くして口を大きく開けるだけだ。遅れてやってきた激痛。手を失った衝撃。それらが合わさって、フレイヤはただ口をパクパクとさせていた。

インプのジェスターはフレイヤの驚愕を無視し、ナイフを再び握りなおした。そして、またザクッと右手首を切り落とした。

手のひら、輪切りにされた手首、それらがきれいな断面を見せ、テーブルに転がっている。二度目の激痛はすぐに訪れた。

「グッ。グ、グギャア」

今回はちゃんと悲鳴が出た。口を大きく開けて、パクパクさせたのち、大きな悲鳴を上げたからか、フレイヤの口からハンカチがこぼれ落ちた。

ジェスターはフレイヤの右腕を押さえながら悲鳴を上げている様子を侮蔑の表情で見ている。

「ギャア」

ミヅキは何事も起こっていないかのようにお茶を飲んでいる。

「ギ、ギャア」

ロデムーは背後から体を密着させ、両肘で胸を挟み続けている。

「おとなしくすべし。暴れると出血がひどくなるのであーる」

耳たぶをなめるような近さでそう囁く。体を密着し、胸を圧迫。耳元の吐息。さらにロデムーの体からは甘い香りが漂ってくる。手首を切られるという異常な状況にあっても、フレイヤはゾクッとしてしまった。

「ギ、ギッ。ギャアアア。手が、手があ」

悲鳴は一瞬だけ途切れ、すぐに再開した。シライシサンやビイナたち侍女はロデムーの背後にいて様子をうかがうことはできない。白い女はあきれ顔

でミヅキを見ている。ミヅキは薄ら笑いの口と残忍な右目でフレイヤを見ながら、ゆっくりとティーカップを置いた。

「手、手が。手がああああ」

「静かにしなさいっ。手は何ともなってませんっ」

何か言われたようだが、その言葉はフレイヤには届かず、わめき続けている。さらに腕の押さえがなくなったのをいいことに、右手をバタバタと動かし始めた。

パコッ。

ロデムーの腕が再び口の中に押し込まれた。今回は多少気道が確保されているのか、フレイヤがあばれるたび、ピープーと笛のような音がしている。

「黙るべし。美月様はまだ発声を許可されていないのであーる」

イケメンがやさしく囁く。それに呼応したのか口の中の腕からドロッとした液体があふれてくる。そして、しびれるような甘い香りが口の中に広がった。

ブルッ。

フレイヤは身じろいだ。ロデムーの発する香りは媚薬の効果でもあるのだろうか。性的興奮が湧き上がってくる。それを抑えようと無理やり心を落ちつかせた。

静かになって右手を見る。手首は血まみれだ。だが、手のひらはちゃんとついている。握ったり開いたりも問題なく行える。切られたという幻影でも見ていたのだろうか。テーブルには血だまりができている。手首の痛みは本物だ。フレイヤはその痛みで顔をしかめた。

「黙ったまま聞きなさいっ。すでにお前は美月様のものですっ。美月様の言うことは絶対と知りなさいっ。お前の命よりこの世界より大事なものと知りなさいっ。従わなければ今と同じように腕や脚をスライスしますっ。切り刻んでつなぎ合わせまた切り刻みますっ。それを三日三晩繰り返したのち状況が判っているか確認しますっ。判っていなければまた三日同じことの繰り返しですっ。判りましたかっ。理解したならうなづきなさいっ」

フレイヤにはうなづく以外の選択肢はなかった。理解の意を見届けたジェスターはテーブルに落ちていたハンカチを拾い上げた。そして、手でしわを伸ばし、再び胸ポケットにしまい込んだ。

「美月様っ。終わりましたっ」

ミヅキはニヤリと笑い、フレイヤを見つめた。

「ソファーに座ってお茶でも飲めば。疲れたでしょ」

放心が止まらず、すぐに反応をかえせないフレイヤをロデムーが抱えあげソファーに座らせる。

「美月様の命に従うべし。さもなくば…推して知るべし」

「美月様はソファーに座ってお茶を飲めと命じたのですっ。従わないのですかっ」

ロデムーとジェスターが同時にたたみかける。フレイヤはふるえる手でティーカップを持ちあげ口を付けた。

プルプルとティーカップは小刻みに揺れている。カップの中身は七分目ま

でしかないのだが。手の揺れの振動で波立ちテーブルを汚している。ジェスターに切り刻まれた右手の痛みも多少やわらいでいる。それでも手が震えているのは痛みのせいではなく、得体のしれない者たちに囲まれているせいだ。

こぼれたお茶は血だまりの上に落ち波紋を残す。ティーカップはカチャカチャと音をたて受け皿の上におさまった。カップが置かれるや否や、横から手が出て受け皿ごと持ち上げられる。そして台拭きでテーブルの上がぬぐわれていく。一枚の台拭きではぬぐいきれずに、二枚目三枚目と使われ、きれいになっていく。テーブルを拭いているのは三人の侍女だ。血まみれとなった台拭きはピイナが回収し、奥の扉の中に消えていった。

「落ちついた?」

ミヅキがそう尋ねるが、落ちつける訳がない。それでもフレイヤは首を縦に動かした。

「言っとくけど、私は嘘が嫌いだからね。嘘だけは絶対につかないでね。念のためもう一度聞くよ。『落ちついた?』」

落ちついてはいない。正直のそう返答すればいいのか。それともミヅキには否定の表現をしないほうがいいのか。

「正直に答えるべし。正直に首を振るべし」

助けを求めるように周りを見回したとき、目の合ったロデムーがすかさず助言を与えてくれた。それに後押しされフレイヤの首は細かく速く左右に動いた。

「ロデムーは優しいね。フレイヤ、命拾いしたんだから、あとで最大限の感謝を伝えなさいよ」

今度は大きく上下に頭が動く。それを見てミヅキはニヤリと笑った。

ストングは気の向くままフレイヤを犯し殴った。そのストングが死んだと知った。くびきがなくなったことに安堵し、喜ぼうとしたとき、新たな絶望を知った。

乱暴なストングから残忍なミヅキへ所有権が移っただけだったのだ。

ミヅキはフレイヤを今まで通り性奴隷として使うという。今まではストング専用でその前も商人のマニだけの妾だった。だが、今後は不特定の相手をさせられるらしい。そんなのはただの娼婦だ。やりたくないが奴隷に拒否権はない。口を閉じることを強要されていて反論もできない。たとえ反論しようとも傷つけられるだけだろう。

「それでいいよね。それとも他にできることがあったりする?」

ミヅキはフレイヤを見ずに尋ねる。口を封じられたフレイヤは同意も拒否もできずにロデムーを見た。

「美月様っ。この女は口をつぐむよう命じられていますっ。返答できませんっ」

インプが助け舟を出してくれなければ不当な暴力を受けることになっていたかもしれない。

「そうだっけ。じゃ、私が不快にならない程度ならしゃべっていいよ。答えを聞かせてくれる?　あなたは私や闇面のために男の相手をしたり、男を

たらしこむ。それがあなたの仕事。それでいいか悪いか。正直に答えて」
「あ、あの。正直に言っていいのであれば、やりたくないです。ですが。ですが、やります」
フレイヤの言葉は声がかすれて聞きにくい。
「じゃあ、ほかにできることは何？　ただ飯を食わせる気はないって言ったよね。何かしてもらうよ。何ができるの」
「何もないです」
「男の相手はできるよね」
「はい」
「でも、やりたくないって言うんだよね」
「いえ、やります」
「なんでやりたくないの？」
「それは、その。あの。不特定の男と寝るのは安い売女のやることです。私はそこまで低い女ではありません。そんな女の真似はしたくありません」
「特定の男と寝るフレイヤは、不特定の男と寝る娼婦よりえらいから、そんな低級の仕事はしたくないってことね」
「はい」
「それはあなたに、多数の男を同時期に満足させる能力がないってこと？」
「ちがいます。やろうと思えばできます。ですから、やります。でも、本心はそんな下衆な仕事はしたくありません」
そう言ってしまうのは冒険だった。いくらそれが本心だとしてもミヅキは不機嫌になりフレイヤを害するだろう。だが、どのみち傷つけられないということはないのだ。もしかすると正直に答えたことによって、やりたくないことをやらずにすむかもしれない。拒否してもしなくても痛みを伴うのなら、一縷の望みに賭けるのも悪くない。
「仕事には上下があって、低級な仕事はしたくないって言うのね。ま、いいよ。どのみちあなたに『仕事』をしてもらうのはしばらく先のことだから。そのときにあなたの気持ちをもう一回聞くから。それまでは、外に出せるレベルになるよう教育を受けてもらうよ。白石さん、ぴぃな、じゅん子はそれぞれ一日の十二分の一を使って、ここでの侍女としての教育をして。ジェスターは日に一回その総括。ロデムーも時間があるときはジェスターのフォローをお願い。期間はとりあえず十日間。十日後に一回様子を見るから。判った？」
「ハイ」
「はあい」
「はい」
「はいっ」
「判ったのであーる」
五人の返事が同時に聞こえる。どうやら拒否しても傷つけられることはなかったようだ。もしかしたらミヅキは思ったよりチョロいのかもしれない。うまくすれば、ここから逃げ出すことも可能だろう。
奴隷には自由権がない。それを持っているのは所有者側だ。所有者は奴隷を

自由に扱える。名目上は生存権も所有者が持っている。だが実際に奴隷を殺す所有者はまれだ。

奴隷は安くない。人一人の値段だ。殺してしまえばそれがゼロになってしまう。育て、価値を上げ、転売する。投資として奴隷を扱っている者もいるくらいだ。そんな風にミヅキはまず教育すると言った。とすれば、投資転売を考えているとみていい。ならば価値を下げるような暴力はないだろう。殺すなどとんでもないことだ。さきほど手が切られたのも幻影を見せられたのに違いない。転売されればここから抜け出せる。ここより悪くなるか良くなるかはギャンブルだが、価値が上がれば奴隷としての待遇もよくなるはずだ。いまはじっとこらえて自分の価値を上げることに専念したほうが有利だ。逃げだすのはそれからでいい。

奴隷の逃亡は多くない。奴隷と言えども最低限の食と住は提供されている。逃亡すればそれすら失ってしまう。

それに逃げ出したところで街門で見つかり、連れ戻されるのが落ちである。逃亡奴隷を捕らえた者はその奴隷を丸一日自由にできる。それがこの国の不文律だ。門番は自分の欲望を満たすため奴隷の通り抜けを厳しく調べる。街から出ようとする奴隷、それも女奴隷はまず脱出に失敗する。下手に逃げ出すより奴隷でいたほうがいいと考える者も多い。

大きな街には街を囲う壁と外に出るための門があり、門番がいる。小さな村には村を囲う柵や堀があるが門番はいない。囲いや堀は外敵、獣や魔物や攻撃者から村を守るためのものだ。

ミヅキはすべての闘士の家に案内しろと言っていた。そのときが最大のチャンスだ。

湖畔の家はさびれた集落のはずれにある。その集落には門番はいない。納屋に打ち捨てられている手漕ぎボートを使って湖を越えてしまえば、誰にも見つからず抜け出せる。あそこからなら街道沿いに二日も歩けば生まれ故郷に戻ることができる。

自分の価値を上げるためにここで教育を受け、嫌になったらチャンスを見て逃げ出す。それでいいだろう。フレイヤの顔に笑みが浮かんだ。

「三人の教育は日の出後開始。順番は三人で適当に決めて。日の入りのころジェスターの総括。空いてる時間は何かクズ仕事でもやらせて」

「ハイ」

「はい」

「はあい」

「あ、フレイヤは寝るし、食事もとるからね。それも考慮してやってよ」

「ええ、そうなの？　じゃあまともな仕事なんかさせられないじゃん」

「だからクズ仕事って言ってるでしょ」

「判りました。何か見繕います。食事は朝と晩の一日二回でいいですね。寝る時間はいかほどでしょう」

ピイナはミヅキに対し雑な話し方をしている。シライシサンは侍女としての話し方だ。どうやらきつい言い方をするインプのジェスターもミヅキの上司ではなく部下であるらしい。この異国の者たちの話し方は上下関係は

が判りにくい。
「そうだね。寝るのは一日の三分の一かな」
「えっ、そんなに？　美月様は毎日、そんなに長くこの女と寝るんだ」
「そんな訳ないでしょうが」
ピイナは何を考えているのだろうか。明らかにミヅキは女性だ。寝ると言ってもそういう意味でないことぐらい判るだろう。
「そうですか。この女とは遊ばないのですか」
シライシサンまで女同士での性交渉を確認している。もしかして異国では同性愛が一般的なのだろうか。
「それは、たまにはもてあそぶよ。せっかく手に入れたんだからね。でもね、タイプじゃないから、毎日とか長時間とかはないかな。ま、試してみてものすごいテクだったら別だけど」
どうやら本当に同性愛はタブーではないらしい。フレイヤにも同性とのプレイ経験はある。あのときは闘士の求めで、売女を含め三人で行為を行った。フレイヤはいいとは思えなかったし、闘士も同じ思いだったのだろう。その後そのような行為が行われることはなかった。
「あ、それで思いだした。フレイヤ、寝ている間にあなたの体を調べさせてもらったけど、腹や背中の青あざは趣味でつけてるんじゃないよね。あと、二種類の性病のキャリアになってるけど、それも好んで放置してるんじゃないでしょ。どっちも治すけどいいよね」
闘士は殴るのが好きだった。だが、フレイヤは違う。青あざなどないに越したことはない。性病だってそうだ。
「私は病気なのですか」
「まだ発病はしてないらしいよ」
「治せるのなら治してください」
「じゃあ、この後、診療所に行って。ついでに首から下の毛も永久脱毛してもらって。私はそっちのほうが好きだから」
「どういうことですか」
「ぴぃな、これが終わったらこの街の診療所でバイシャジャに今の話、伝えて」
「はあい」
「治療と施術の間に、みんなでフレイヤの教育スケジュールたてといてね」
「はあい」
「じゃ。あと、何か聞きたいことある？」
ミヅキはフレイヤの相手をする気が薄らいできたようだ。フレイヤを無視して周りと話を始めた。それを待っていたかのようにシライシサンが、すぐさま口を開いた。
「ギルドでのこの女のポジションはどこでしょう」
「ポジション？　地位ってこと？　あなたたちよりは当然下だよね。マルちゃんと同じかな。や、マルちゃんの一段下ってことで。うん、ギルドの中では最下層でいいんじゃない。この女には闇面への忠誠心なんかないんだし」

「では呼び名はどういたしましょう」
「呼び名？」
「私たちがマルヤタを呼ぶときは『マルヤタ』と呼び、マルヤタが美月様を呼ぶときは『美月様』と呼んでいます。彼女が私たちを呼ぶときは『何々さん』です。この女のもそれでよろしいでしょうか」
「いいよ、それで。あ、それともマルちゃんより下だから、あなたたちのことも『様』付けで呼ばせる？」
「美月様と同列などそんな恐れ多いことはできません」
「じゃあ、白石さんが適当に決めて。あ、ただ、御屋形様は名前で呼ぶのは禁止。『御屋形様』と呼ぶのも極力避けるように。ま、この女が御屋形様のことを話すことなんてないはずだけどね」
「承知しました。そう教育します」
「しっかり教育してやって。殺す以外は何してもいいから」
「かしこまりました」
シライシサンは頭をさげた。
「他には」
「奴隷の首輪を替えるべし」
「うんうん。そうだったね。診療所が終わったら替えるよ。ついでに首輪の効力も見せとこうか」
「それがいいのであーる」
奴隷は首か手首か足首に輪を付けている。そこには所有者の名前と紋章が刻まれている。フレイヤも左足首と首に輪をはめていた。紋章は闘士のものではなくマニリンド商会のままだ。
奴隷の輪は魔道具になっていて簡単には外せない。所有者が変わったときも輪はそのままで、先ほど見せられた契約書類で権利移動を証明するのが普通だ。だが、絶対に外せない訳ではない。解除魔法が使える高位の魔法使いなら外すことができる。しかし、魔法使いに高額な金を払うより、そのままにして書類で所有権を主張するほうが得だ。
ミヅキがフレイヤを譲り受けた条件や対価は知らない。だが、奴隷魔道輪を解除し、新たな魔道輪を付けるなどと費用が掛かることをするのは、それだけフレイヤが高く転売できると踏んでいるのだろう。
「提言しますっ」
ジェスターが声を張り上げた。ミヅキはあごをしゃくって発言を認める。
「この女は不要です。殺す許可をくださいっ」
フレイヤは目を丸くしてインプを見た。今までのミヅキの発言からして、彼らの目的は奴隷転売のはずだ。金の元を殺すなどありえない。
「理由は何？」
「この女がいる場合といない場合ではいないほうがギルドの利益につながりますっ」
「具体的に言って欲しいんだけど」
ジェスターの発言は矛盾している。奴隷を殺すほうが利益になることなどあるものか。ミヅキの問いももっともだ。

「接待の相手であれば垠凌オブや協力者のマアガがいますっ。彼女らはすでに恥ずかしくない礼儀作法を持っていますっ。この女は持っていませんっ。こんな者が闇面に関わる者として人前に出れば闇面の品位が落ちますっ。それは損害を受けたのと同じことですっ」
「この女の命は、その損害より安いってジェスターは思うんだね」
「当然ですっ。タダ同然の女の命と我ら闇面の品位では比べ物になりません」
「他に言いたいことは」
「美月様はそこまでしてご自身のハーレムを大きくしたいのですかっ」
「言ったでしょ。タイプじゃないって。遊ばないとは言わないけれど、この女はハーレム部隊に入れないよ」
「では何故この女を殺す許可がいただけないのですかっ」
ミヅキはニヤリと笑いながら頭を振った。
「確かに今の時点じゃあ、この女には価値がない。殺しちゃったほうが利益があるね。でもね、使えるように育てれば、ジェスター、あなたが思っている以上に利益をもたらす女だよ」
「理解できませんっ」
「それに、マアガは単なる協力者。強制はできない。垠凌の男好きも趣味で仕事じゃないからね。彼女にも強制はできないよ。でも、この女はそれが仕事。私の命令で強制することができる。この差は大きいよ」
「たとえそうだとしてもこの女は不要ですっ。この女に闇面への忠誠心はありませんっ。このままここに置くのは不利益以外の何物でもありませんっ」
「確かに忠誠心はかけらもないだろうね。その点では、筋肉莫迦の財産を分捕ったら、ジェスターに言うようにあとくされなく殺しちゃうべきなんだろうけど。でもね、私はこの女にも利用価値があると踏んでるんだよ」
「それがハーレム要員ということですかっ」
「違うんだけどなぁ。うんと、じゃあ、百日間だけ待って。百日たってもジェスターが『不要』って判断するんだったら、あなたの自由にしていいよ」
「判りましたっ。楽しみにしていますっ」
「一年かけて育てるつもりだったんだけどなあ。ま、いっか。白石さん、ぴぃな、じゅん子、ジェスター、ロデムー。とりあえず十日、教育よろしく。殺すのは禁止。それと、もう一つ条件を付け足す。私が不機嫌になることをフレイヤに対してすることも禁止。ただし、白石さんはその条件から除外。白石さんは必要とあらば私が不機嫌になるだろうことをしてもオッケー。私はしばらくノータッチのつもりだったけど、期間が短くなったから時々介入するよ。いいね。他に何かある？　なければこれでフレイヤの面接は終わり。何かあったら別途連絡して」
「ハイ」
シライシサンが代表する形で返事をした。
「ぴぃな、バイシャジャの処置が終わったら連絡して。そっち行くから」
ミヅキはそう言うと「はあい」というピイナの返事を待たずに執務机に戻っ

ていった。

診療所で全裸にされ、体中に粘り気のあるジェルを塗られる。そして、白衣を着た老紳士が体のあちこちを触りまくる。その後、服を着るようにわれ、錠剤を七つ渡される。その錠剤は毎朝ひとつづつ飲まなければいけないとのことだ。

診療の間中、ピイナはぶつくさと独り言を言いどおしだった。

「どう？」

いつの間に来たのだろう。ミヅキが背後から声をかけてきた。ミヅキの後ろには白い女もいる。

「あらかたは治しました。あとは七日ほど抗生物質を飲めばすべて完治するでございましょう」

フレイヤが返事をする前に白衣の老紳士がそう答えた。

「そう」

「念のため十日後にもう一度診察させていただきたいと存じます」

「フレイヤ、だってさ。忘れないようにね」

「え、あ、はい。あ、あの、それは十日後にまたここに来るということでしょうか」

「それ以外の何があるっていうのよ。まさか、バイシャジャがわざわざあんたのために訪ねてくるなんて思ってないよね」

「あ、いえ。そんなことは。はい。判りました」

自分に言い聞かすように『十日後。十日後』と繰り返すフレイヤをミヅキはじっと見ていた。

「じゃあ、輪っか取り替えるから」

そう言いながらミヅキは革製の首輪とそれより小さい輪を二つ、懐から取り出した。

今の輪は金属製だ。鉛色の表面に商会の紋章がデンと描かれ、いかにも奴隷輪といった形状だ。一方、ミヅキが持っている革の輪には青い宝石のような石がいくつも埋め込まれていて、一見では奴隷輪には見えない。おしゃれなチョーカーと見間違えてしまうほどだ。

ミヅキはフレイヤに近づき首輪に手をかけた。そしてしばらく凝視したのち、口の中で何かつぶやいた。

チャッ。

金属のぶつかる音がする。それと同時に首が軽くなった。気づくとミヅキが今まで首にあった奴隷輪を白い女に手渡しているところだった。

魔道具の輪を外せるのは専門の高位の魔法使いだけだ。そのはずだ。簡単に外せるようでは奴隷輪の意味がなくなる。

外せる者が限られ、かつ、報酬が高額であるからこそ奴隷輪として有効なのだ。簡単に外すことができれば、いくら生活面での不安があっても、奴隷は輪を外して逃げていくだろう。

普通の人では行えないことをミヅキは簡単に行った。そして、唖然としているフレイヤの首に革の奴隷輪を装着して何かつぶやいた。

「足、出して」
事務的なミヅキの声がする。
ミヅキの機嫌を損ねると、周りから非難され痛い思いをするのは学習済みだ。そんな思いをしなくて済むよう、フレイヤはすぐさま右足を前に出した。だが、慌てて動いたためバランスを崩し、よろめいてしまった。
「何やってんの。私に靴下を脱がさせるつもりなの。そこの丸椅子にでも座って、靴下脱いで足輪を出しなさいよ。ったく、そこまで言わないと判んないほどのノータリンなの、あなたは」
そんなこと、判る筈がない。でも、そう言い返す訳にもいかない。フレイヤは黙ったまま、後ろにあった丸椅子に座り、靴を脱ぎ、右足の靴下も脱いだ。見慣れた足輪がそこにある。首輪は自分で見るのは難しいが、足輪はよく見える。もう何年もこの足輪を付けてきた。初めは金属の違和感が気になっていたが、今ではつけていることを忘れるくらいだ。
椅子に座ったまま足を前に伸ばすと、ミヅキはフレイヤの前で膝をつき、左手で足首をつかんだ。そのまま足輪も解除するのかと思ったが、右手は足首から太腿に向かって滑るように上がっていった。くすぐるような指の動きにフレイヤはゾクゾクとしたものがこみ上げてくるのを感じていた。
「きれいに脱毛されてるね」
ミヅキはそう言うと今度は両手で足輪を包み込んだ。
「解呪」
おそらくそう言ったのだろう。小さく言葉が発せられたのと同時に輪が開き足から落ちていった。
金属の輪を落ちるに任せたミヅキは、手に引っ掛けていた革の輪をさっと足に巻き付けた。
「蒸着」
ミヅキの呪文で青の石が埋め込まれた輪のつなぎ目が、そこの部分だけ金属で覆われた。その金属部分には丸い紋章が描かれていた。
「左腕も出して」
そう言うやいなやミヅキが左腕を引っ張る。そして、足と同じように左手首にも奴隷輪を付けたのだった。
「じゃ、これからその輪の効力見せるから、ついてきて」
そう言うと、ミヅキは返事を待たず、白い女を引き連れて診療所から出ていった。ピイナも立ち上がり二人に続いてついていく。フレイヤは慌てて靴下と靴を履き、その後を追いかけた。
見知らぬ街を歩き、連れてこられたのは街門だった。
「この街には奴隷がいないから仕事のし甲斐がないって言ってたでしょ。だから貰ってきたよ、奴隷。これが私の性奴隷だから。逃げ出そうとしたら、あなたたちの好きにしていいからね」
そう門番に話し、首と手首の奴隷輪を確かめさせた。
「他の人にも伝えといてね。あ、それと、このあと外で花火上げるから。音がしても気にしないで」と言い、白い女とピイナ、それにフレイヤを引き連

れてピクニックへ行くかのようにのんびりと街の外へ出ていくのだった。
街門の扉は木製だが、門は石造りだ。高さは二階建ての家の屋根より高い。ちょうど切通しのようなところにあり、片側は崖、もう一方は門の石造りがそのまま壁になっている。その壁も長くはない。家五軒ほどの長さだ。その先も崖になっている。壁は街の内側に寄り添うように建てられた家の外壁を兼ねているのだろう。街の外から見るとところどころに小さな窓があり、その外には洗濯物がはためいている。
街壁の外側、洗濯物の下には東屋と天幕が二張りあった。それらはおそらく、街へ入る者たちで行列ができたときのためだろう。東屋と天幕の前は馬車が数台停められるスペースがあり、その先には人の背丈ほどの幅の空堀があった。
空堀には木の橋が架けられ、街門からは一本の道が伸びている。カルスト台地なのだろうか、山を下るようにくねった道の周りは背の低い草の中に白い石が露出している。見渡す限り、前方には民家は見えない。
ミヅキは堀に架かる橋を渡った。そのまま道を進むのかと思ったのだが、橋を渡ったところで左に折れる。堀に沿って進み、堀が終わっても草を踏みつぶしながら進んでいく。
一行はミヅキと白い女、ピイナとフレイヤの四人だけだ。このまま逃げ出してしまえば、門番につかまることなく自由の身になれるかもしれない。幸いなことに革の輪は一見では奴隷輪に見えない。他の街で調べられても、ファッションでつけていると答えれば、だますことができるだろう。
フレイヤは用心深くあたりを見回した。ここはどこかの山のふもとだ。左手には山。右手には一面が低い草が生い茂るカルスト台地。そしてその中を通る一本の道。
全く見覚えがない。ここがどこだか判らない。道を行けばいつかは他の街にたどり着くだろうが、そこまでどれくらいかかるか判らない。門の前には誰もいなかった。街を訪れるものは少ないのだろう。それが、他の街から遠いことが理由であれば、街にたどり着くまで一日二日かかるかもしれない。
フレイヤは頭を振った。今は逃げ出すときではない。今はまだ。
そのまましばらく進んで、ミヅキは足を止めた。左手の山は急な斜面で山道もない。手入れのされていない雑木林になっている。そこから一人の女が斜面を滑り降りるようにして姿を現した。背は高い。ミヅキとほぼ同じか、若干低いくらいだ。ややとがっている耳が長い髪の間から見え隠れしている。容姿的に見てエルフ種のようだ。胸に山兎を抱えたその女が近づいてくる。
「この子でいいですか、美月お姉さま」
ミヅキは差し出された山兎を一瞥し、軽く背をなでる。兎は人に慣れているのか、人を知らないのか、おとなしくなでられるままにしている。
「いいんじゃない」
そう言いながらミヅキは革の輪を兎の首に巻き付けた。そして、その兎をフレイヤに手渡してきた。輪はフレイヤにつけたのと同じつくりに見える。違いはついている青い石の数だ。
「逃げないようにしっかり持って。逃がしたらタダじゃおかないよ」

フレイヤは身を固くした。そして、力を入れて兎を抱きしめた。このミヅキがタダでおかないというのなら何をされるのか。どんなことかは判らないが、とてつもないことをされるだろうことは想像に難くない。

「フレイヤ。あなたにこの輪の効力を見せたげるから。この輪はね、古代のアーティファクトなの。そこら辺の奴隷輪と違って、奴隷を逃がさないような仕組みが組み込まれてるの。どうせ口で説明してもあなたは信じないでしょ。逃げ出すとどうなうか実演してあげるから、しっかり見といてね」にらみつけるように吊り上がった右目でにらみ、ミヅキがそう告げる。

「ぴぃな、説明した通りにやって。距離九十。フレイヤはぴぃなについてって」

ピイナは「はぁい」と返事をすると、草を踏みながら進みだした。フレイヤもあわてて後を追う。逃がさないように力を入れて抱いているのがいけないのだろう。歩くたびに兎が暴れるが、手を緩める訳にはいかない。ミヅキは『逃がすな』と言ったのだ。『殺すな』と言ったのではない。

ピイナはフレイヤがちゃんとついてきているのを確かめるように、何度も後ろを振り返りながら進んでいる。その足が急に止まる。そして、ミヅキを見てゆっくりとうなづいた。

「奴隷輪の説明をするね。その輪にはGPSみたいなのが仕込まれていて、場所を監視してるらしいよ。で、ギルドダンジョンかここイグリンの街の中か、美月様から百メートル以内か、白石支津香から百メートル以内ならいいんだけど、そこから外れちゃうと、カウントダウンが始まって、ドッカーンだからね。判った？」

何を言っているのか判らない。ジイピイエスとは何か。ギルドダンジョンは普通のダンジョンとは違うのか。それはどこにあるのか。イグリンは聞いたことがないが、話の流れから、おそらくこの街のことだろう。メートルイナイは距離のことかもしれないが百メートルイナイはどのくらいの距離なのか判らない。

フレイヤがそれらの不明を口にするとピイナの目は、おもむろにさげすむような目に変わった。

「本当にこの国の人は何にも知らないんだね。それにすぐ聞いてばかり。聞いてばっかりいないで、ちょっとは自分で考えようとは思わないの」

知らないものは知らない。考えたところで、知らないものを知ることができる筈がない。でも考えろという。

「でも知らないのです」と言いかけてフレイヤは口をつぐんだ。頭の中にイメージが浮かんできたのだ。そのイメージに従って、ピイナの言葉を繰り返してみた。

「『奴隷輪の説明をするね。その輪には位置探査の魔道具みたいなのが仕込まれていて、場所を監視してるらしいよ。で、闇面ギルドの所有地かここイグリンの街の中か、ミヅキサマから人丈六十ほど以内か、シライシシヅカサンから人丈六十ほど以内ならいいんだけど、そこから外れちゃうと、数を数え始めて、数え終わると、爆発するからね』ということですか」

「あなたは私を莫迦にしてるの？　最初からそう言ってるじゃない」

「それはこの首輪が爆発するってことですか。数字はいつ終わるのですか」
「全く質問ばっかりだね。それを見せてあげるって言ってんの。準備するから、黙ってそこに立ってて」
そういうと、ピイナは小走りで先に進み、少し離れたところの石にオレンジ色の根菜をばらまいた。そして、再び小走りで戻ってきた。フレイヤの前まできたピイナは奪うように兎を受け取り優しく背をなでた。フレイヤの腕の中では暴れていた兎も、背をなでられてから落ち着いてきたようにみえる。
完全におとなしくなるまで背をなで続ける。そして、目がとろんとしてきたところで、地面におろし、どこからか根菜を取り出して兎の口に押し付けた。兎はクンクンと匂いを嗅いでいたが、すぐにモグモグと根菜を食べ始めた。すると、ピイナはスッと根菜を引いた。兎はつられて前に出る。モグモグ。スッ。モグ、スッ。徐々に兎は前に出ていく。スッと引かれる距離も徐々に長くなって、兎はピョンピョンとオレンジの根菜を追いかけながら進んでいく。モグモグ。ピョンピョン。モグ、ピョンピョンピョン。
追い付いた兎が食べようとしたとき、ピイナは持っていた根菜を放り投げた。オレンジの根菜は緑の草の上で放物線を描き、すでに根菜がまかれている石の近くに落ちた。兎はそこに向かって跳ねていく。それを見届けると、ピイナはフレイヤのところへ走って戻ってきた。
「見てて、兎の輪」
兎は石までたどり着き、上に置かれた根菜を食べ始めた。
ピカッ。
輪の石が一瞬光り、色が青から赤へ変わる。
ピカッ。
すぐさま次の石が光る。兎は異変に気が付いたようで、首を伸ばして周りを見る。その間にも残りの石が光り、赤へと変わっていく。すべての石が青から赤に変わった次の瞬間、ドンッという大きな音と共に兎が突如沸き上がった白煙の中に消えた。
「えっ？」
驚きで口を開けるフレイヤを残し、ピイナが煙の中に入っていく。煙は草はらを渡るそよ風によって次第に晴れていく。薄くなった煙の中から姿を現したピイナの腕には、首から上のない兎の死骸が抱かれていた。
「美月様を見て」
兎に釘付けになっているフレイヤにピイナが声をかける。フレイヤは反射的に振り返ってミヅキを見た。
「あそこからあの石までが許された距離だから。ちゃんと覚えておかないと死ぬよ」
今度は石を見る。確かにミヅキから石までは人丈六十ほどだ。
「兎、さばける？」
フレイヤが状況を把握する前に、ピイナは兎を突き出した。
「できません」
フレイヤは首を横に振った。獣をさばくことができるのは猟師か肉屋ぐら

いだ。片田舎では鳥屋なら誰でもさばけるようだが。子供のころ過ごした村は、田舎だったが、獣をさばけるのは猟師とその家族ぐらいだった。もっとも、猟師は村の人口の三分の一を占めてはいたが。

兎は見事に首から上が切断されていた。あれだけの爆発があったにしては首輪から下がきれいすぎる。首の切断面も刃物で切ったようにまっ平だ。

「頭を下にしたほうがいいです。血抜きをしないと肉が臭くなります」

「ふうん。そうなんだ」

ピイナは足を持ち、首を下にした。

ドボドボドボ。

溜まっていた血なのだろう。首の切り口から垂れ落ちていく。

「よく知ってるね。知ってても解体はできないんだね」

血抜き大事なのは誰でも知っている。でも、知識と実践は別だ。

「はい、すみません」

「じゃあ、夜美風《イェメイファン》にさばいてもらおっと」

ピイナはそう言いながら、血が滴る兎をぶら下げながら、ミヅキに向かって歩き出した。

「ああ、数聞かれてたっけ」

ピイナは歩きながらフレイヤを振り返った。

「え、あ、はい」

何のことかは判らなかったが、フレイヤはそう答え、ピイナの後についていった。

「これは四つだけど、あんたの手首は八個。足首には十二個の石がついてるよ。首は十六個。それが猶予の時間だから」

兎の首輪には四つの赤い石がついている。フレイヤは自分の左手首を見て石を数える。くるりと回して裏側も見ると、青い石は全部で八個だった。続いて右足首を見ると、確かに手首より石の数は多そうだ。許されない場所に出ると、この石が光り始めて、手や足や首が切断されてしまうのか。

「やっぱ、解体の鍛練しようかな。このくらいは自分でさばけると便利だよね。どう思う？」

フレイヤの心配をよそに、ピイナがのんきな口調で聞いてくる。獣の解体など手が汚れるだけだ。近くにさばける人がいるなら、その人に任せればいい。

「解体は汚れますよ。血とか内臓とか」

「内臓っ。それって大腸とか膀胱だよね」

「はい、そうです」

「そっか。大腸かぁ。ってことは中はうんちだよね」

ピイナは兎の脚を広げて尻をじっと見だした。その顔は何故だか嬉しそうに見えた。

「そ、そうです。汚いんでイェメイファンとかいう人がさばけるんだった、自分でやらずにその人に任せればいいと思いますよ」

ミヅキたちを目前にしてピイナの脚が急に止まった。そして兎の尻を見てにやけていた目が据わった目に変わりフレイヤをじろりと見た。

「今、何てった？」
今までの雰囲気とがらりと違う。口調も非難めいた口調だ。いったい何がいけなかったのだろう。
「あ、あの。ですから、イェメイファンという人が兎をさばけるなら任せればいいと」
ドサッ。兎が手から落ちる。
「パンツを足元におろして。両手をついて、尻を突き出してよ」
「えっ、え」
「早く」
「え？」
ピイナはスッと動き、左足でフレイヤの両足を刈った。そして、背中を押して地面に押し倒した。その動きは侍女の動きではなく、熟練の戦士に匹敵する動きだった。
「痛いっ」
あまりの出来事にフレイヤは何もできない。ただ悲鳴を上げるだけだ。
「両手をついて尻を突き出す！」
何が何だか判らないままフレイヤはピイナに従った。ピイナは突き出された尻を覆うスカートをパッと跳ね上げた。そしてあらわれたパンツを両手でズルッとずりおろした。
「えっ、何。何？」
「あんたはよっぽどの脳足りんなんだね。そんな莫迦には言葉じゃなく体で教えるしかないでしょ。私たちを呼ぶときは『さん』をつけること。それがあんたの設定。私を呼ぶときは『ぴぃなさん』、夜美風を呼ぶときは『夜美風さん』と呼ぶこと。そう言われたでしょ、さっき。忘れちゃったみたいだね。簡単には忘れないように体に覚えさせたげるから」
そう一気にまくしたてると、どこからか取り出したオレンジ色の根菜を丸出しになったフレイヤの尻にブスリと突き立てた。
「ギャア。痛い。やめて、やめてぐださい」
「あんたの教育は私たちが言いつかってるんだからね。あんたが学習しないとそれは私たちの責任になるんだよ。だから私はあんたを甘やかしたりしない」
そう言いながら根菜を尻の穴に抜き刺ししている。
肛門を突き立てられるのは初めての経験ではない。闘士は生理中の性交をきらった。だが、生理のときは性行為を強要しない訳ではなかった。多くは口で処理を強いられたが、口ではなく尻での行為を強いられることも幾度かあったのだ。だが、肉の固まりが入れられるのと、根菜が入れられるのではダメージが違う。
「ぐっ。ざける。やめて、裂けてしまいまずっ」
「人の呼び方を覚えるまではやめないよ」
「覚えます。ぐっ、痛い。やめて、覚えますから」
「じゃあ、私を呼んでみて」
「ピ、ピイナサン」

「夜美風は」
「イェメイファンサン」
「もう一度！」
「イェメイファンサン」
「ぴぃな、何そんなところで欲情してんの。用が済んだんなら早くこっちに来なさい」
ミヅキの怒声があがったからか、フレイヤが正しく名前を呼んだからか、ピイナの手が止まった。
「こいつを教育してたんですよ。不機嫌にならない方法なら何してもいいって言ったじゃない。こういう教育方法って、美月様は不機嫌にならないでしょ。っていうか、好きでしょ」
「何言ってんの。スカトロはあんたの趣味。私の好みじゃないからね。いいから、早く戻ってきなさい」
「判りましたよ」
ヌポッと音を立てて根菜が引き抜かれる。尻の穴はヒクヒク動きすぐには閉じない。
「もう一度、私と夜美風を読んでみて」
「ピイナサンにイェメイファンサン」
「私たちを『さん』付けで呼ぶのがあなたの設定。自分の設定は絶対に忘れないようにね」
ピイナはそう言いながら尻の穴に出し入れしていた根菜をペロリと舐め、フレイヤの「あ、ハイ」という返事を待たず、首のない兎を拾い上げミヅキのもとに向かった。
「夜美風、さばいてくれる？」
「ぴぃなは解体できないんだっけ」
「うん。でもこれから鍛練して出来るようにするよ。鍛練に行き詰まったら協力してね」
「いいよ。そのときは声かけて」
このエルフがイェメイファンのようだ。ピイナは兎をエルフに手渡そうとした。
「ちょっと見せて」
そこに割って入ったのはミヅキだ。むんずと兎をつかみ首の切断面をじっと見ている。そして満足げにうなづくと首輪を外し兎をイェメイファンに渡した。兎を受け取ったイェメイファンはどこからかナイフとシートを取り出し、地面に広げたシートの上で兎をさばき始めた。
ピイナは食い入るようにその様子を見ている。兎はあっという間に皮をはがれ、部位ごとに切り分けられていく。肉の固まりが積まれていくさまを見てフレイヤは空腹を感じた。そういえば目覚めてから何も食べていない。口にしたのはミヅキの執務室でお茶を飲んだだけだ。その空腹感に呼応するかのようにフレイヤの腹がクウと鳴った。
「お腹すいちゃった？」
腹の音が聞こえたのだろうか、ミヅキがニヤリと笑いながら聞いてくる。

「え、あ。ハイ」
「じゃあ、その兎、肉団子にして食べる?」
そう言うと、ミヅキの口角はさらにあがった。
「肉団子ですか」
「そう。肉団子。フレイヤは好きでしょ、肉団子」
フレイヤは突如えずいた。肉団子という言葉を聞いただけで胸と腹がゾクゾクして吐き気がする。理由は判らないが心と体が肉団子を受け付けないのだ。気持ち悪さからえずいて吐こうとしても腹の中には何もないらしく出てくるのは「オエ」という音だけだ。
「戻るよ」
そう言って街に戻っていくミヅキとイエメイファンそして白い女を見ながらもフレイヤはその場でただ吐き気と戦うだけだった。
「何やってんの。早く追いかけないと爆発するよ」
ピイナの金切り声がなかったら、フレイヤの手首、足首、そして首はなくなっていただろう。すでにミヅキは人丈二十ほど離れてしまっている。それが人丈六十になれば、首がなくなる。吐き気の理由が判らないままフレイヤはえずきながらミヅキたちを追いかけた。
長い一日が終わった。フレイヤは目覚めた部屋に戻ってきていた。どうやらこの部屋が割り当てられた部屋らしい。ここで寝て、明日の朝には侍女たちによる教育がまた始まるのだ。
今日はもう何もする気になれない。激動の一日だった。侍女服も脱がずにベッドに横になったとき、ドンドンドンドンと扉を叩く音が聞こえた。
「ハイ、ただいま」と言って跳ね起きたのはいつもの癖だろう。ノックは闘士でないのだから、今までのようにする必要がない。だが、今でも相手を待たせる訳にはいかない身だ。
フレイヤはため息をつきながら扉に向かい、外に向かって押し開けた。
そこに立っていたのはミヅキだった。
「ちょっといいかな」
そう言ってフレイヤの同意を待たずに部屋の中に入ってくる。拒否されるのは最初から頭にないようだ。もちろんフレイヤもその選択肢がないのは判っている。
「どう?」
ミヅキは奥まで来るとベッドに腰かけ、そう聞いてきた。
「覚えることが多くて大変ですが、しっかり覚えるようにします」
「これあげるから、頑張りなよ。じゃないとジェスターに処分されちゃうからね」
差し出した手には藁半紙の束と小枝のような黒くて短い棒があった。
「これは何でしょう」
「メモ帳がわりに使って。重要のことはそれに書くといいよ」
「ハイ」
フレイヤは渡されたものをじっと見た。

「試しに今日のことで忘れちゃいけないこと、書いておきなよ」
「え、ハイ。え、あの、私はペンを持っていません」
書付を行うのは特殊な人たちだ。普通の人は字を書かない。書けない人も多い。フレイヤも読むことはできるが書くことはできない。だからペンなど持っていない。ペンを見っているのは一部の役人か、上流階級か、文字書き職人ぐらいだろう。
「ペンならそこにあるでしょ。それマジックペンだからね」
あごで示した黒い棒をよく見ると、棒の片側は弾力性のあるゴム製のもので覆われている。フレイヤはその覆いを外した。中からは羊毛を丸く固めたようなものが現れた。
ペンはペン先にインクをつけて使う。覆いの中を覗いて見たがそこにインクはない。これでは何も書けない。
「これがペンだとしても、インクがありません」
「むうう」
フレイヤの指摘にミヅキは唸ってしまった。
「ちょっと貸してみて」
そう言って、黒い棒と覆いを手に取った。
「いい、見てて」
ミヅキは説明を始めた。黒い棒はマジックペン。すなわち魔法ペンという魔道具らしい。柔らかい覆いはキャップで普段はこれをつけておく。そしてペンを使うときに外し、インクを付けずにそのまま書く。すると、文字でも絵でも描くことができる。そんなインクいらずの魔道具だった。
ミヅキはそれを実演して見せた。藁半紙に魔法ペンを押し当てて、スッと横にずらす。するとそこには黒い線が描かれていた。
「使い終わったらキャップを閉めないとすぐに書けなくなっちゃうからね」
ミヅキはそう言うと魔法ペンにキャップを付けフレイヤに返した。
「魔力が逃げ出すのをキャップが押さえているのですね。判りました」
「ま、そんなところ。じゃ、書いて、忘れちゃいけないこと」
「『キャップを付ける』と書けばいいのですか」
「そんなことじゃなくて、今日あったことで忘れちゃいけない大事なことを書きなさいよ」
「大事なこと。ですか」
今日はいろいろなことを聞かされたし、教わった。起きた出来事や聞いたことが多すぎて、何を書けばいいのか判らない。そもそも、フレイヤ文字が書けない。
「多すぎて何から書けばいいのか判りません。それに私は字が書けません」
怒られるかと思い小声で伝えたのだが、ミヅキは何とも思わなかったようだ。「そっか。そうだよね」と言いながらニヤリと笑っている。
「あなたにとって忘れちゃいけないこと、教えてあげる。絵でも記号でもいいからメモして。いい？」
「あ、ハイ」
「じゃあ、そこ座って」

「あ、ハイ」
フレイヤが机に向かうと、ミヅキはベッドに寝そべった。
朝、バイシャジャからもらった丸薬を飲む。十日後、診療所に行く。ミヅキは嘘が嫌い。
言われるたびにフレイヤはそれを絵にしていった。
「ま、重要なのはその三つだね」
「これだけですか」
「他に何かある？」
「名前を呼ぶときは『サン』をつけると書いていいですか」
「ああ、私には『様』をつけて、支者たちには『さん』を付けるってやつね。ぴぃなにいじめられたのはそれが原因なんだってね」
「ハイ」
「じゃあ、それも書いときな」
「ハイ」
サマという字とサンという字は知らないが、間違っていても自分だけが判ればいいのだ。そう言い聞かせてメモを仕上げていった。
「描きました」
「ちょっと見せて」
ミヅキは別途から起き上がると、フレイヤの背後に立った。
「これ、今描いたんだよね」
大きな声にフレイヤは振り向いた。当たり前のことをなぜ聞くのだろう。藁半紙も魔法ペンも今さっき渡されたばかりだ。以前から持っていた訳ではない。
「ハイ。そうです」
「フレイヤは絵がうまいんだね。よくこんなに早く上手に描けるね。私が見ても何が描いてあるか判るよ。これってバイシャジャでしょ。これは私だよね。で、ぴぃなとじゅん子と白石さん。これは美風かな」
「最後の人はイエメイファンサンです」
「うん、夜美風。私は美風って呼んじゃうけど、本当の名前は夜美風だから、フレイヤは夜美風って覚えとけばいいよ」
「あ、ハイ」
サマやサンを付けて呼ぶのがフレイヤの設定であるように、イエメイファンをミカゼと呼ぶのがミヅキの設定なのだろうか。そういえばミヅキだけはシライシシヅカのことをシライシサンと呼んでいる。異国人は人の名前を呼ぶ設定を個人個人持っているようだ。
「それにしても、絵、上手だね。フレイヤにこんな才能があったんだ。みんなちゃんと特徴とらえてるし。感心しちゃうよ」
子供のころは絵を描くのが好きだった。よく描いていた。もちろん、紙やペンはないので、キャンバスは地面でペンは拾ってきた小枝だったが。
題材は人や獣だった。書かれるのは写実的なものではなくデフォルメしたイラスト的なものだ。いつも怒っている村はずれの年寄りを飢えた犬に例

えたり、歩くのが遅い隣の家の男を牛に例えたりしていた。そして、地面に描いたその絵を見て子供たちで笑いあっていた。
それは遊びの一種だった。友達に求められれば注文に応じて、指定された人を描くこともしていた。
やがて、絵がうまいことを聞きつけた村の長が収穫祭の絵を描くように言ってきた。神様に捧げる収穫祭の絵は牛や羊や穀物を受け取る女神様の絵を村の広場に大きく描くのが習わしだ。
例年は祭祀を預かる女司祭がその絵を描いている。ただ、司祭の描く絵は丸と直線で描かれた図形のような記号で、説明されなければ丸に十字が女神様で楕円が穀物俵、楕円に四本の短い棒がついたものが牛とは判らないだろう。
請われたフレイヤはいつも描いているように漫画風の絵を描いた。牛が隣家の男に似ていたり、羊がいつもベイベイ泣いている長の孫に似ているのもいつも通りだ。
穀物俵も飛び出した穂から麦と米の違いも判っただろう。
奉納絵で特に力を入れたのは女神様だ。フレイヤの中では女神様はふくよかな女性だった。いつも御社（みやしろ）に御座（おわ）し、働かなくても、みんなから牛や羊や麦や米や酒が奉納される。どってりとした豊満な体で、みなが飢えることのない豊作を約束するのだ。
描いていて長の娘に似てしまったのはその体型のせいだろう。
出来上がった絵を見て村のみんなはほめたたえてくれた。「フレイヤはすごいな」「オ、オラはウ、ウシじゃないんだな」「女神様は長の娘に似てないか」
「容姿といい絵の才能といいフレイヤは美の女神様に愛されているのね」
その年の収穫祭は例年以上に始まる前から賑やかだった。
その空気が一変したのは司祭の女が来たときだった。
「何だこの絵は。こんなのは女神様ではない。私は都の教会で女神様の御尊容を拝見した。それはそれはスラッとした美しいお姿だった。神様を醜いポンチ絵で冒涜するとは、何たる罰当たりだ」
まだ子供だったフレイヤは知らなかったのだ。女司祭と長の娘が不仲で反目しあっていることを。それなのに長の娘に似せて女神様を描いてしまった。もし、司祭に似たガリガリの姿に描いていたら結果は正反対となっていただろう。
それからフレイヤは人前で絵を描かなくなった。自分の絵を見て不快なる人がいる。その事実だけでいくら請われても人前では一切絵を描くことはしなかった。
大人は地面に絵を描くことはしない。何か書くのは契約書へのサインぐらいだろう。だが奴隷はサインを求められることはない。思い返してみると、人前で何かを書いたのはあの奉納絵以来かもしれない。
「そうだ。こんなに上手いんだったらみんなの似顔絵描いてよ。明日ぴぃなに人物レポート持ってこさせるから、それに描いて。紹介がてらみんなに会わせるから」
「あ、あの。私は人前で絵は描けません」

「え。今描いてたじゃん」
「私の絵は人を不快にさせるのです。なので、人前では描けないのです。先ほどそれを思い出しました」
「この絵が？　これで不快になるの？」
ミヅキはメモを手に取りじっくりと見ている。
「私は好きだけどなぁ。ま、フレイヤがそう言うならいいや。でも、人前じゃなければ描けるんだよね。なら、重要なことのメモは一人のときでいいから今後もしっかりつけるようにね」
「あ、ハイ。え、あの、重要かどうかはどう決まるのですか」
「そんなのはあなたが決めればいいでしょ」
「あ、ハイ」
「それと、これ。渡しとく」
そう言ってミヅキは指輪を渡してきた。
「この指輪は何ですか」
「ジャンプの護符替わり。一回だけここにジャンプできるから。カウントダウンが始まったら使いな。死にたくなければね。ここにもどればカウントダウンは止まるから」
何気なく受け取ろうとしていたフレイヤの手が止まった。そうなのだ。この街から出ると首から上がなくなってしまうのだ。
「わ、私がこの街を出ることがあるのですか」
「言ったでしょ。ストングのすべての棲み家に案内してもらうって」
「そ、そのとき私は爆発するのですか」
「ぴぃなから聞かなかった？　町の外でも私から百メートル、人丈六十以上離れなければ大丈夫だって」
「聞きました」
そう答えるフレイヤの頬にミヅキの手が伸びてくる。
「町の外では私にずっとくっついているんだね」
頬をなでながらニヤリと笑うミヅキの声にフレイヤはぞくぞくとした感覚を感じていた。

翌日から忙しい日々が始まった。
日の出前に起きてシャワを浴び、侍女服を着て、身支度を整える。朝会と呼ばれている会合中に朝食を食べる。朝会の出席者はギルト闇面の幹部たちのようだが、そこで食事をするのはミヅキとフレイヤだけだ。
ミヅキの横でみんなの注目を浴びながら摂る食事はまるで食べた気がしない。味など判らない。初日に味の感想を聞かれて「おいしいです」と答えたが、その後「私は嘘が嫌いだよ」と言われ「緊張で味が判らないです」と答えなおす羽目になっていた。
朝会は最後まで付き合わされることもあれば、途中で退席を求められることもある。途中退席はフレイヤに知られたくない話があるときだろう。
食事の後はピイナから教育を受ける。侍女としての在り方。仕事の内容を勉強していく。ピイナの仕事は主に掃除だ。その手際は素晴らしい。ものすご

いスピードできれいに掃除していく。フレイヤも言われたとおりにやってみるが、早さも出来栄えも彼女には遠く及ばない。

尻に根菜、人参を入れられた経験があるので、不出来をなじられ、折檻を受けるかと思ったが、そんなことはなかった。ただ便器の汚れが残っていたときは「もったいない」と言いながら自らその汚れを落としていくだけだ。

ピイナの教えの基本は「まず考えること」だ。これは彼女自身が常に言われ続けていることらしい。

確かにピイナは考えなしに話したり行動することがある。物おじせずに動く行動力はすごいと思うが、ミヅキやジェスターに向かってストレートな言い方をするときなど、見ているだけでハラハラしてしまう。

ピイナの後はジュンコに教えてもらう。

ジュンコはミヅキやジェスターの手伝いをしている。書類整備と検分、そして執務がスムーズにいくよう適切な時にお茶の用意などもしている。事務以外では洗濯も彼女の主な仕事だ。そのほかに服のデザインとか製作とかをしているらしいが、それは侍女としての仕事ではないとのことで、その様子を見せてくれることはなかった。

ジュンコの教えの基本は「侍女は目立つな」だ。いかに陰に徹し支えるか。それを説いている。その過程で「空気になれ」とも言う。空気は見える訳でもないし、存在を意識するものでもない。だが、生きる上で必要なものだ。そういう存在こそがトラブルに巻き込まれず、かつ、人の役に立てるのだという。目立つとトラブルの種になる。それはフレイヤも身に沁みている。絵が上手いが故に女司祭の反感を買ったのも、容姿がいい故に妾として売られたのも、目立ったせいだ。絵が人並みなら反感を買うこともなかったし、十人並みの容姿なら売り飛ばされることもなかっただろう。

ジュンコが言うには、ただ目立たないだけではいけないらしい。人前に出ず、何もしなければ目立ちはしないが、それではいてもいなくても同じで、不要な者とされてしまう。集団の中では不要な者は排除される。いかに目立たず、いかに役に立つか。その兼ね合いが難しいとジュンコはこぼしていた。

昼頃にジュンコの時間が終わる。次はシライシシヅカの番だが、シライシシヅカはすぐには来ない。来るまでの間にその日教わったことの復習として、自分の部屋の掃除と自分の服の洗濯をすませる。自分の部屋は寝室とシャワと便器だけだ。それでも時間がかかってしまう。服は侍女服が二着とシャツが三着、下着が三組支給されている。下着とシャツは毎日取り替えている。その使用済みをこの時間に手洗いしておくのだ。

シライシシヅカはいつも忙しく働いている。ミヅキの朝食の用意、お茶の支度。鍛冶屋での製錬とナイフ作り。畑で綿摘みをすることもあれば、人参や芋を収穫することもある。ミヅキが出かけるときは、同行して身の周りの世話もしているようだ。

ミヅキから仕事を尋ねられたとき、フレイヤは『闘士の身の周りの世話』と答えた。自分でも、下半身の相手をしているだけで身の周りは世話していないことは判っていた。だが、シライシシヅカの働きを見ると自分が気安く

『身の周りの世話』と言ってしまったことを悔やんでしまう。それほどシライシシヅカはミヅキに尽くしている。
ミヅキが何を考え、何を欲しているか。それだけを気にして行動している。
「これこれをして」
そう言われる前にそれを行う。もし、言われてしまったときは悲しげな顔になる。言われる前に行動できなかった自分を恥じているのだ。
シライシシヅカの教えは「相手をよく観察する」だ。相手が何を考えているか想像すること。それが人のために働くことにつながるというのだ。
人は人との関わりの中で生きていく。人から必要にされ、人を必要として人と関わって過ごす人生は、一人で過ごす人生より有意義で楽しい。
シライシシヅカはフレイヤに向かってそう説くのだった。
「ミヅキサマはシライシシヅカサンを必要としていますが、シライシシヅカサンにとってミヅキサマは必要とは見えません」
「私がいかに美月様を必要としているかそれが判らないの？　あなたには何も見えてないのね。まずは私と美月様を観察しなさい。そうすれば、私にとって美月様がいかに大事で必要なお方か判るでしょう」
フレイヤの疑問に、シライシシヅカはそう言って冷たく笑うのだった。
シライシシヅカとの時間の後半は文字の書き取り練習に当てあてられている。シライシシヅカも読めはしても文章は書けないらしい。書けない者同士ということで、二人同時に書き取りの練習をするようミヅキに命じられたのだ。
シライシシヅカはすぐに文字を覚えた。そして、すぐにきれいな文字を書くようになった。
フレイヤはまだ間違えることも多いし、なにより字が汚い。手本を真似しても、どうしても線が震え、そして全体に丸みを帯びてしまうのだ。
同時に書き取りの練習を始めたにもかかわらず、すぐにこれだけの差が出てしまった。どこまで離されるかと不安になったのだが、単語の書き取りになって、シライシシヅカの進みがぴたりと止まった。
シライシシヅカは文字がきれいに書ける。だが、単語が書けないのだ。教師役の軍人が手本として書いた単語は写すことができる。手本以上にきれいな文字で書いて見せる。そこまではいいのだが、口で伝えられた言葉は単語として書けないでいた。
例えば、朝食、夕食だ。朝食は『朝に食べるもの』の組み合わせなので『日の出直後《ピュリ》』と『食べる物《アッ》』が書ければ『朝食《アッピュリント》』と書くのは難しくない。夕食も同じで『日の入り後《シュワ》』と『食べる物《アッ》』で『夕食《アッシュワンタ》』を書くのは雑作ないはずだ。ところが何故かシライシシヅカは「夕食《アッシュワンタ》」と書いてみてと言われて「おやつ《アッセムルンタ》」と書いてしまうのだ。
どうやら、『夕刻《セムル》』と『日の入り後《シュワ》』の区別がつかないらしい。それは異国人の感覚の違いなのだろうか。
シライシシヅカは単語の書き取りは苦手のようだが、ほかの作業は非常に優秀だ。鍛冶場での作業も本職の鍛冶職人には劣るものの素人とは思えな

い出来栄えだ。農作物の収穫も手際よく丁寧な仕事ぶりだった。
三人の侍女たちから教えを受け、文字の書き取り学習を終えると、もう、日が傾き始める夕刻だ。そこからジェスターの来る日の入り刻までは、侍女としての仕事をする。
三人の侍女の誰かとペアを組み、二人一組で働くのだ。ピイナもジュンコもシライシシヅカも手慣れた動作でさの作業を行っている。フレイヤにはまだそれができない。彼女らの背後でただアタフタしているだけだ。
日の入り刻になると、ジェスターとの面談になる。執務室の応接セットに座りその日の報告をすると、問題点を指摘され、一方的に責められる。何故そういう行動をしたのか。何故こう行動しなかったのか。そうやって矢継ぎ早に責めたてられている。
ジェスターに指摘されると、そうしてしまた自分、そうしなかった自分がいかに愚かか思い知らされる。そして反論できずに口をつぐんでしまう。そうすると、なぜ返事をしないのかとまた責められる。
その口調は非常にきつい。憎しみのこもった口調で責めてくる。ジェスターはフレイヤが嫌いなのだ。殺したくてたまらないのだ。だが、フレイヤにはその理由が判らない。ジェスターに対して失礼なことをしたことも、言ったこともないはずだ。
ジェスターはピイナにもミヅキにもきつくあたっている。もしかするとジェスターはフレイヤ個人ではなく人間種が嫌いなのかもしれない。何せジェスターは亜人種のインプなのだから。
ジェスターの叱責の場には時々ロデムーも同席している。ロデムーはいつも話を聞いてうなづいている。フレイヤがどんな失敗をしても、ただ穏やかに「そんなときはこうするべし」と提言してくれる。ロデムーが言うには、以前聞いたことを忘れたがために同じ失敗を繰り返しているので、忘れないようにすれば失敗は減るとのことだ。
「忘れない工夫をすべし」
そうアドバイスしてくれた。忘れない工夫。それはメモを取ることだ。ミヅキも重要なことはメモするよう言っていた。ロデムーは重要でなくても覚えておいたほうがいいことはメモするよう言っているのだ。ミヅキに逆らって重要でないこともメモしていいのだろうか。藁半紙と魔法ペンを消費していいのだろうか。
重要かどうか。それはフレイヤが決めていい。ミヅキはそう言っていた。重要でないことも「重要だと思いました」と言ってしまえばメモしていいのだ。
そこで大事なことを思い出した。ミヅキは嘘が嫌いだ。重要だと思っていないことを「思った」と言うのは嘘になる。ミヅキに嘘をつくなんてそんな恐ろしいことはできない。
忘れないためにはメモすればいい。でもそれはできない。助けを求めるようにロデムーを見るが不思議そうな目で見返されただけだ。
そこへ隣の執務机からミヅキの苛立った声が響いた。
「ったく。言いたいことがあるんだったら、ハッキリ言えってんの」

ジェスターとの面談のとき、大抵ミヅキが執務机で作業をしている。契約書なのか提案書なのか、文章を読みサインしている。何もない机を十本の指でパタパタと叩いていることもある。

机で仕事をするミヅキは独り言が多い。まるで誰かに話しかけるような独り言を言うこともある。だから今の言葉もフレイヤにかけられたものか独り言なのか判らない。ただ、発言の内容とタイミングはフレイヤへの叱責にも思える。

「すみません。重要でないこともメモしたいのです」

消え入りそうな細い声でフレイヤは返した。もし独り言だったのならミヅキは反応しないだろう。

「メモしたいんだったらすればいいでしょ」

独り言ではなくフレイヤへの言葉だったようで、返事はすぐに返ってきた。フレイヤは内心ホッとした。小声でも返事をしておいてよかった。何も言わないでいたら、ミヅキを無視したことになってしまった。

「ですがミヅキサマは『重要なこと』をメモするよう言いました。許可なく重要でないことをメモする訳にはいきません」

「大事なことじゃないのに何故メモしたいの」

「忘れないようにするためです」

机を叩いていた手が止まり、右目がジロリとフレイヤを見た。

「あなたが書きたいと思ったものを書きな。それが重要じゃなくてもいい。そもそも重要だったかそうじゃなかったかなんて後になんなきゃ判んないんだから」

そう言い、左のこめかみを押さえた。

「判りました。ありがとうございます」

「バイシャジャ、苛性ソータ作っといて。そ、水酸化ナトリウム」

今のは独り言だ。バイシャジャはここにいない。

ジェスターとの面談が終わると一日が終わる。執務室の奥の侍女たちの控室で用意された夕食を一人で食べる。他の三人の侍女はここでは食べないようだ。もしくは食べる時間が違うのかもしれない。彼女らはフレイヤが自室に戻った後も働き続けている。朝も早くから働いていていつ休んでいるのか判らない。もし同じように働くよう言われてもフレイヤはその要求を満たすことができないだろう。

夕食を終え自室に戻るともう何もする気になれない。侍女服を脱ぎ下着になってベッドに横たわる。何度かそのまま眠ってしまった。

気力があるときは二日目に受け取った人物レポートに似顔絵を描いていた。ミヅキからは期限を言い渡されていない。それに、顔を見たことがない人も多いので、まだ全体の一割ほどしか進んでいない。

このレポートに載っている人には『サン』をつけるということらしい。

レポートは藁半紙と違って真っ白なすべすべした紙でできている。枠の左上に名前が書かれ、その下に異国の文字なのだろうか、記号のようなものが並んでいる。枠の中の大部分は空白になっていて、フレイヤはそこに似顔絵を描いていた。

こんなに白くてすべすべした紙はかなりの高級品のはずだ。庶民が手に入れられるものではない。貴族だってどうだか判らない。そんな紙をフレイヤのポンチ絵で汚してしまっていいのか。そんな葛藤がない訳ではないが、似顔絵を描くように言ったのはミヅキだ。それに逆らう訳にはいかない。

そんな日が続いていた。八日目の朝にはバイシャジャからもらった丸薬がなくなり、十日目。バイシャジャの所へ行く日だ。

「今日は脱穀して。米と麦。終わったら出た藁持って、ここの工房来て」

朝会が終了するとその直後に今まで教育内容には口を出していなかったミヅキが珍しく指示してきた。今までも侍女たちに言われたことをしてきただけなのでフレイヤに異存はない。むしろ、工房は診療所に近いのでついでに寄ることができればありがたいほどだ。

「はあい。じゃあ私は最初に脱穀教えるね」

フレイヤが答えるより早くピイナが返事を返した。

「じゅん子は紙漉きできる？」

「やったことないです」

「白石さんは？」

「前に一度、和紙を漉きました」

「じゃあ、工房来るのは白石さんのときね」

「かしこまりました。連れて伺います」

「シライシシヅカサン。その前に診療所に寄っていいですか。今日はバイシャジャサンを訪ねることになっています。よろしければ、先に工房に行っています」

シライシシヅカのときならその前に空き時間がある。そのときに用を済ますことができれば無駄がない。

「診療所へ一人で行くというのですか」

「ハイ。場所は知っています」

「いえ、一人で出歩くのかと聞いています」

一人で歩くのは禁止されていただろうか。そんな記憶はない。これも聞いたことを忘れてしまっているのか。思い起こしても、この屋敷の外で一人になったことはない。

「あの。私は一人で屋敷の外に出てはいけないのでしょうか」

「あなたに移動範囲制限があるのは知っていますね。そこを逸脱するとあなたは爆発して死にます。そうなるとそれは私の監督責任になります。無用なトラブルを避けるためにもあなたは一人で出歩くべきではありません」

「そうなのですか」

「なら、私の今日の教育は工房で機織りにします。裏庭からは私が連れていきます。その際、バイシャジャに声をかけておけば、診察もスムーズでしょう」

シライシシヅカとジュンコの間で話がまとまった。シライシシヅカの深読みやジュンコの機転とバイシャジャへの配慮には感心してしまう。

フレイヤは人から言われるままに生きてきた。子供のときは親や周りの大人たちの言うことに従い、性奴隷になってからは主である商人や闘士に言

われるまま行動した。自分で考えることなどしなかった。ましてや裏に隠された意図を探ることや、予定の変更をすることなど思いつきもしなかった。それを考える。これがピイナの言う「まず考える」と言うことなのだろう。

「話はまとまった？　じゃ、白石さんの番になったら呼んでね。工房行くから。あ、あとね。フレイヤの首がとんでも、私は監督責任とか言わないから安心して」

ミヅキがシライシシヅカの深慮を否定する。深く考えても無駄だったようだ。だが、シライシシヅカに落胆の様子はない。満足げな笑みさえ浮かべている。

「美月様はお優しいので、そうおっしゃると思っていました。そして、フレイヤが爆発しても何も言わないでしょう。ですが、私だけが特別権限を与えられたということは、私に監督責任があると承知しています。私はそれに応えるだけです。その任を全うできなければ美月様は何もおっしゃらなくとも、失望するでしょう。私は美月様に失望されたくありません」

「白石さんは真面目で律儀だね。そういうところ大好きだよ」

『考える』のはこれほど難しいことなのか。ミヅキが何を思っているか。思っていながら表面上はどう話すのか。それをここまで深く『考え』なければいけないのか。

話すことがその通りでないことは判っている。でも嫌味ならその口調で判る。上流階級の人間は嫌味を嫌味っぽくなく言ったりするので判らないときもあるが。ただ、判らずに勘違いしたところでフレイヤを笑う者はいない。

いや、いた。過去に二人ほどフレイヤを笑った。

一人はかなり上位の貴族の第二夫人だった。あるパーティで嫌味を言いそれに気付かず正直に返答したフレイヤに「あら、意味が通じなかったかしら。こんなあからさまな嫌味も判らないなんて、誰にでも股を広げる売女さんは、頭ではなくお股でものを考えているのね」と笑ったのだ。

その夫人はそれから十日もたたないうちに屋敷に押し入った強盗に惨殺された。その死体は頭部と下腹部がグチャグチャに叩きつぶされていたという。

たまたまそのとき訪問していたストングが強盗を追い払ったため、物的盗難の被害はなかったそうだ。

もう一人は王弟の邸宅の門兵だった。それは闘士の性奴隷になりたてで、上流階級との付き合いにも慣れていないころだった。馬車から降りるときにもたついてしまい、馬糞の上に尻もちをついてしまったのだ。闘士は失態をなじりフレイヤを蹴飛ばした。それにより、馬糞が跳ねあがり、フレイヤの顔にべたりと張り付いたのだ。

それを見てそばにいた門兵が鼻で嗤った。そして何かをつぶやいた。何を言ったのかフレイヤには聞こえなかったが、それは闘士を怒らせる言葉だったらしい。

「俺の所有物を笑うのは、俺を笑うのと同じだ」

闘士はそう言って持っていた短刀で門兵の鼻をそぎ落とした。

「これで二度と鼻で嗤うことはできなくなったな」
そしてアハハと笑いながらフレイヤを助け起こした。
「ありがとうごっ」
ドスッ。
フレイヤの腹にストングの拳がめり込んだ。
「お前も俺に恥をかかせるな」
闘士の所有物であるフレイヤを笑う者はいない。だが、その闘士ももういない。裏の意図に気付けないフレイヤはこれから人に笑われるだろう。笑われたくなければ、真意をつかみ取るしかない。そのためには人を観察して、深く考えるのだ。それはシライシシヅカとピイナの教えに一致する。
フレイヤはピイナとシライシシヅカを見た。ピイナはすでに会議室の清掃を行っている。シライシシヅカはミヅキに褒められたのがよほど嬉しかったのだろう、恋する乙女のような目の輝きで恥ずかしそうに笑っていた。
フレイヤも立ち上がり、自分の食べた朝食の食器とミヅキの食器を盆にとった。
そう言えば強盗を追い払った礼として、闘士は第二夫人の暮らしていた屋敷を譲り受けたはずだ。あれは使用権をもらったのだろうか。それとも、所有権をもらったのだろうか。もし後者なら、ミヅキをそこに案内することになるだろう。そんなことを思いながら、食器を洗うためフレイヤは会議室を出ていった。

診療所は混んでいた。多くの者が順番で待っている中、フレイヤは割り込みで対応してもらった。そこで腕に針を刺され血を採られた。そこで薬瓶を差し出され、ミヅキに渡すよう言いつかった。診察室から出ると、順番待ちをしていた年寄りに「若いのにかわいそうにね」と声をかけられたが、何がかわいそうなのか、なぜ割込みさせてもらったのかは判らなかった。
診療所の前にはシライシシヅカが来ていて、そのまま工房へ向かった。そしてシライシシヅカとフレイヤはミヅキから藁半紙のつくり方を教わった。
藁を小さく切る。鍋に切った藁とバイシャジャからの薬品を入れ、煮込む。さらに細かく切り刻む。水桶に移し、四角い木枠で漉く。木枠から外し、布と漉いた藁を交互に敷く。その上に鉄板と大きな石をいくつも置く。しばらくしたのち、石と鉄板を除け、藁を天日で干す。
すると藁半紙が出来上がる。
藁半紙作りはミヅキの指示のもと、フレイヤとシライシシヅカの二人で行った。鉄板や石の移動は二人ではどうにもならなかったが、周りの人たちが進んで手伝ってくれた。ミヅキは指示しただけだが、藁半紙作りの間、何もしていなかった訳ではない。フレイヤたちの横で白い紙を作っていた。おそらく紙作りの技持ちなのだろう。ものすごい速さで作業を行い紙を作っていた。
シライシシヅカと合わせて計三十枚の藁半紙ができあがる。その間にミヅキの手によって二束の白い紙ができていた。一束は五十枚だ。
「そっちのの一割とこの一束、苛性ソーダ代としてバイシャジャに渡して。

私は先に帰ってるから、渡したら執務室きて。十日間の総括するよ」
「何も知らないし、何も考えてないよ」
「同じ間違いが多いです」
「注意力が足りません」
それが三人の侍女、ピイナ、ジュンコ、シライシシヅカのフレイヤに対する十日間の評価だった。
フレイヤははそれに対し、反論するすべを持たない。それぞれの評に対して
「その通りです」と答えるだけだ。
「やはり早めに殺すべきですねっ」
ジェスターがにらみつけた。
「そんなフレイヤはこの十日間で何を学んだ？」
「掃除と洗濯。それと」
「そんなことじゃなくて。うんと、聞き方を変えるよ。この十日間で重要だと思ってメモしたのはどんなこと」
重要でなくてもメモしていいと言われてから毎晩いろいろメモしていた。だがそれ以前に重要だと思ってメモしたことは三つだ。
「三つあります。一つは『まず考える』です。二つ目は『目立たずに役に立つ』、三つめは『よく観察する』です」
その三つが侍女たちの教えだ。教師の教えは重要なことだ。
「で、それに対してフレイヤは何をしているの」
「え、あの」
何もしていない。三つの教えが判ったことで満足してしまっていた。考えなくてはと思ったが実際に考えたかというとそうでもない。観察が重要なことは理解したが、観察していない。ましてや人の役になど立っていない。
「何もしてないです」
「ほら見なさいっ。所詮は口先だけの女なのですっ。こんな女を飼う意味はありませんっ」
「そう？　たった十日で重要なことが判っただけでも立派だと思うよ」
「確かにそれは認めますっ。ですがっ、実践しなくて何の意味がありますかっ」
「私はそういう意識を持っただけでも十分な意味を認めるけどね」
「意識だけでは利益につながりませんっ」
「まだ十日目だからね」
「九十日後を楽しみにしますっ」
ジェスターはどうしてもフレイヤを殺したいようだ。ミヅキはそんなジェスターからフレイヤに視線を変える。
「知らないことは覚えるしかないね。あとは。発言の前にまず考える。今、こういったら相手はどう思うか。こんなことをしたら周りはどんな目で見るか。それを考える。相手がどう思うか、どう見るかは相手のことを知らなきゃ判らない。相手や周囲を知るにはそれをよく見ること。どんなときにどう反応するか、どんな表情をするか。それを見ること。そうして周りに合わ

せれば、特異な目で見られることはないよ。そして相手の希望を見極めてそれにそう行動や言動をすれば、その相手は喜んでくれるよ」
「あ、ハイ。判りました」
「いや。たぶん判ってないよ」
そう言ってミヅキはニヤリと笑った。
「え、あ、あの。どこが判ってないのでしょうか」
「フレイヤはさあ、この十日間。侍女としての教育受けてどうだった？」
フレイヤの問いには答えず、逆に関連のない質問をしてくる。主に尋ねられたらすぐに答えなければならない。それが奴隷だ。
「大変でした」
「いろんなことしたでしょ。その中で何が大変だった？　不思議だったこととかない？」
侍女の仕事は多岐にわたっていた。掃除、洗濯、お茶の支度、事務の手伝い。屋敷が広いので掃除は大変だ。やってもやってもやり残した場所が残っている。洗濯は今のところジュンコの手伝いだけで、自分で手洗いしているのは自分の着る分ぐらいだ。ジュンコの代わりをするとなったら大変だろうが、今はそれほどでもない。お茶の支度は簡単だが、タイミングが難しい。フレイヤにはいつ用意すればいいか判らないのだが、三人の侍女にはそれが判るようだ。事務の手伝いはまだしたことがない。事務系でしているのは仕事前の執務机の拭き掃除ぐらいだ。おそらくフレイヤに書面の内容を見られたくないのだろう。
そこまでは侍女の仕事として理解できる。だが、農作物の収穫や鍛冶場での作業、機織りや紙漉きなどは侍女の仕事とは思えない。それらは、農夫や鍛冶屋、職工の仕事だ。
鍛冶屋や機織りは洗濯同様、手伝いしかしていなかった。材料を運ぶのを手伝ったり、道具の用意をしたり、作業後の片付けをした程度だ。
「収穫は体力を使うので疲れます。それに収穫は侍女の仕事とは思えません。何故侍女が収穫をしなければいけないのか不思議です」
その答えにミヅキは満足そうにうなづいた。
「今回はちゃんと考えて返事したよね。十日間何をしたか思い出して、それぞれどうだったか考えて、それから返事したよね。だから一瞬、間があった。でもさっきは即答だったよね。『大変でした』って。それって考えてなかったから即答できたんでしょ。その前の『判りました』もそう。私はね、やたらと難しい話をしたんだよ。そんな簡単に判るはずないんだけど」
その通りだ。返事をすることを優先してしまったため、深く考えてはいなかった。
ミヅキはなんと言ったか。『よく見る』『考える』だ。それはシライシシヅカとピイナの教えと同じだ。
「すみません。考えていませんでした。今、考えました。今度こそミヅキサマの言うことが判りました」
「藁半紙、それじゃあちょっと大きいから半分に切って」
ミヅキはニヤリと笑い、また話を変えた。フレイヤはテーブルの上の藁半紙

を見た。何故ここで藁半紙なのだろう。
「え、あ。ハイ。ええと、今ここでですか。それとも後でですか」
「どっちだと思う？」
「判りません」
「そうだね。判らないだろうね」
「すみません」
ミヅキは鼻で嗤った。判る訳がないのだ。ミヅキの話はいつも唐突に変わる。そんな気まぐれを理解するのは無理だ。
「私は藁半紙じゃないからね。あんたには判んないよ」
ミヅキは藁半紙ではない。当たり前だ。何かの例えなのだろうが、意味が判らない。おそらく異国の例えなのだろう。フレイヤは頭をさげた。
「すみません。判りません」
「ジェスター、今か後か、どっち」
「おそらく今かとっ。ですがっ、美月様はもっと判りやすく伝えるべきですっ」
「じゅん子、どっち？」
批判されたミヅキは矛先をかわすように質問の相手を変えた。シライシシヅカは自分にもとばっちりが来ることを恐れたのか、机の引き出しをあけ整理を始めた。
「今です」
「ぴぃなはどう思う？」
「今ですね」
「白石さんは」
シライシシヅカのポーズは実らなかったようだ。
「ナイフ代わりに私の肥後守を使っていいです。テーブルの上で直接切ると傷がつくのでこのカッターマットを使ってください。定規はこちらです」
シライシシヅカは逃げていたのではなく道具を用意していたらしい。縦横に白い線の入った緑のマットと透明な定規、それと折りたたみ式のナイフをテーブルの上に並べた。
「美月様が話されているとき、何故あなたは美月様を見ないのですか。美月様は藁半紙ではありません。藁半紙を見ても美月様のお気持ちは判りません」
そうか、それが『見る』『観察する』ということか。フレイヤは窺うようにミヅキを見上げた。
「半分に切ったら穴開けて紐を通してメモ帳にしな。で、普段から持ち歩いて気になったことはその場でメモすること。藁半紙のつくり方は教えたよね。紙がなくなったら自分で作りな」
ミヅキはニヤリと笑い、どこからか取り出した千枚通しと麻紐の束をテーブルに置いた。
「何故、侍女が農業や工人の仕事をするか疑問なんだね。じゃあ、明日から午後は各生産の概略を教える。一技能につき五日間。第一工程から第四工程を各一日ずつ。五日目は総括。全六技能で計三十日」

ミヅキはフレイヤから視線を外し、三人の侍女を順番に見て行く。
「あなたたちが持っていない技能（スキル）はオッチャに頼んで。各工程の概略と全体での位置づけを教えて。それとその工程でのサポートの仕方。それだけでいい。フレイヤが作れるようになる必要はないから。そうだね、午前は収穫か近郊農場の手伝いでもさせて。日々の反省会はとりあえずもういいかな。ジェスターは五日目の総括の最後に言いたいこと言って。ま、途中でも何かあれば介入するのは当然だけど。それでいい？」
「ハイ」
「はあい」
「はい」
「はいっ」

翌日、午前の農作業は綿花の摘み取りだった。屋敷の裏手の畑に行こうとしたが、担当だったジュンコに止められた。
「メモを忘れてます。常にメモ帳を持ち歩くよう言われてますよね」
そうだった。慌てて部屋に戻りメモ帳と魔法ペンを侍女服のポケットに押し込んだ。
「何と書きましたか」
昨日、メモ帳を作った直後、ミヅキに言われて書いたのは『話す前に考える』『人をよく見る』だ。「フレイヤは人を見るのが得意なんだから、まずそこを伸ばしな」と言われたが、自分に観察力があるとは思えない。観察力があればシライシシヅカに注意されることはなかっただろう。
メモはミヅキたちの前で書いた。書き取りはまだ練習中なのでスペルは間違っているかもしれない。普段、シライシシヅカと並んで書き取りをしていたせいか、字を書くのを見られるのには抵抗を感じない。絵はまだ見られることに抵抗がある。常にメモするには絵文字を使わなくて済むよう、文字を覚える必要がある。『文字を覚える』
「昨日、三つ書きました。考える、見る、文字を覚える、です」
「昨日の話を聞いているのではありません。今、何と書いたか聞いているのです」
今は何も書いていない。急いだので、取りに行って戻ってくるまですぐだったはずだ。何か書く時間はなかった。そもそも、何を書いたと思ったのだろう。
「何も書いていませんが」
「美月様がおっしゃったはずです。メモ帳を常に持ち歩きすぐにメモするようにと。それなのにあなたはメモ帳を忘れました。二度と同じ間違いをしないように、『メモ帳を持ち歩く』と書くべきでしょう。何故書かなかったのですか。美月様は『すぐにメモするように』と言われたのですよ」
その通りだ。常にメモするよう言われていた。それなのにメモ帳を忘れたのは注意力不足だ。
メモは毎朝見返している。丸薬を飲み忘れないように始めた習慣だったが、丸薬が終わってからもその習慣は続いていた。

今朝も見返したが、メモ帳を持ち歩くことは忘れてしまっていた。何故ならメモに『メモ帳を持ち歩く』とは書いていなかったからだ。書いてあればメモ帳を忘れることはなかっただろう。

ジュンコに指摘され、メモを取りに帰っても、そのとき『メモ帳を持ち歩く』とは書かなかった。

「すみません。今すぐ書きます」

「謝罪はいりません。私は何故書かなかったのか聞いているだけです」

書かなかったのは、書くことを思いつかなかったからだ。『メモする』というのは頭の中にあった。でも、その言葉と行動が結びつかなかったのだ。

「すみません。思いつきませんでした」

フレイヤは深く頭をさげた。それは初日に教わった最敬礼だ。ジュンコはそれをじっと見ている。フレイヤは恐る恐る頭を上げ、ジュンコを見返した。

ジュンコは何も言わず視線も外さない。

「あ、あの。何か間違っていますでしょうか」

「もう忘れたのですか」

「何をでしょう」

ジュンコは溜息を漏らした。

「やはり忘れて同じ間違いを繰り返すのですね。覚えられないのであれば体に覚えさせます。パンティを脱いでください」

『体に覚えさせる』それは初日にピイナから受けた罰だ。あの、尻の穴に人参を差し込まれるという罰だ。

あのときは名前に『サン』を付けなかったがために罰せられた。今回はメモ帳を忘れたから罰せられるのだ。

フレイヤはパンツをずらし、尻を突き出した。

「私は脱ぐように言ったのです。聞こえませんでしたか。脱いで私に渡してください」

「すみません。ピイナサンの体に覚えさせる罰はこれでした」

「私はぴぃなではありません。スカトロに興味はありません」

片足ずつ足を抜き、小さく畳んでジュンコに渡す。股がスースーして不安が増してくる。

「スカートをたくし上げて、丈を膝上にしてください」

冷たく聞こえるジュンコの声に従い、フレイヤはかろうじて膝が見える位置まで裾を持ち上げた。先ほどに増してさらに股がスースーする。

「もっとです。白石支津香と同じ所まで持ち上げてください」

そんなことをすれば下着をつけていない下半身が見えてしまう。

そうか、シライシシヅカのスカート丈が短いのは罰を受けているのか。過去に何らかのミスをしてその罰として極端に丈の短いスカートを履くよう強要されているのだろう。フレイヤもこれからパンツをはかずにスカート丈を短くしなければいけないのか。戸惑いから手が止まると、ジュンコが近寄りスカートをたくし上げピンで留めた。裾は膝のはるか上だ。腰をかがめたら尻が丸見えになってしまう。

「これでは見えてしまいます」

「恥ずかしいですか」
「もちろんです」
「何故このような目にあっているか判りますか」
「メモ帳を忘れたからです」
その答えにジュンコは大きく溜息をついた。
「違います」
何が違うのだろうか。今はずっとメモの話しかしていない。メモ帳を持っていないことを指摘され、罰を与えられている。それ以外に何があるのか。考え込むフレイヤにしびれを切らしたのだろう。ジュンコが冷たい口調で話し始めた。
「あなたはメモ帳を忘れました。それは一回目の失敗です。人はミスをします。一回目の失敗は良しとしなければなりません。メモを取りに戻りましたが『メモを持ち歩く』と書きませんでした。これも一回目のミスです。ミスが多いですが一回目なのでこれも良しとしなければなりません。私は『メモを持ち歩く』と書かなかったことを指摘しました。それにあなたは答えました。『今すぐ書きます』と。そう言ったにもかかわらず、言ったそばからあなたはメモを書くことを忘れてしまい、未だにメモに書いていません。これは二回目のミスです。三回目の同じミスがないよう、体に覚えさせるしかありません。あなたは言ったそばから忘れるのです。生半可な恥ずかしさではまた忘れてしまうでしょう。人前で陰部を見せるのは並大抵の羞恥ではありません。そのくらいのことをしなければあなたはまたメモするのを忘れてしまいます。判りましたか。判ったのなら忘れる前に『メモを忘れるな』とメモしてください」
「え、あ、ハイ」
「返事はいりません。今すぐメモしてください。しないのならば、もっと裾を上げさせます」
これ以上あげたら、確実に見えてしまう。フレイヤはポケットからメモ帳を取り出し、急いで『メモを持ち歩き常にメモする』と書き綴った。
「では畑に参りましょう。昼まではその格好で作業し、みなの注目を浴びてください」
フレイヤがメモを取ったのを確認すると、ジュンコはそう告げ、大股で裏の農場へ向かった。フレイヤもジュンコを追いかけるが、歩みの速さを合わせるとスカートの裾から尻が出てしまう。ジュンコがいつもより速く歩くのは罰のうちなのだろう。フレイヤは手を後ろにまわし、スカートを押さえながら小股でせわしなく足を動かすのだった。丈を短くするのはずっとではなく昼までで済むことを喜びながら。

気になったらすぐメモする。ジュンコに注意されてからは日にいくつもメモを取っていた。一枚の藁半紙に四つか五つのメモを書いている。それでも、日に三枚は藁半紙を使っていた。
メモを多くとっているのを見たミズキから、一日の終わりにとったメモをまとめるように命じられ、寝る前にメモした中から一番重要なことと、二番

目に重要なことを別の紙に抜き出していたので、一日の紙の消費量は四枚から五枚だ。メモ帳はまだ余裕があるが、すぐになくなってしまうだろう。近いうちに藁半紙を作らなくてはいけなくなりそうだ。

一日のメモをまとめた後、フレイヤはベッドに横たわった。日々はあわただしく過ぎていく。性奴隷として過ごしていたときとはまるで違う。

闘士に殴られ犯される日々。ただ、それ以外は料理も洗濯も掃除もすることなく、ただ闘士の側にいるだけのだけの日々。

今は、掃除、洗濯に加えて農作業や物作りの手伝いで体を動かし続ける日々。メモを取り、観察という名のもと人の顔色をうかがう日々。どちらが幸せなのか判らない。おそらくどちらも不幸なのだろう。

フレイヤはのっそり起き上がると、シャワを浴びるため服を脱ぎ、全裸になった。

ここは魔道具があふれている。洗濯をしてくれるセンタッキ。布を縫うミシン。食べ物を温めるデンシレンジ。この部屋にもシャワとドライヤと魔法ペンがある。水を流して使うトイレも魔道具かもしれない。すべてに部屋には天井にランプの魔道具が埋め込まれていて、壁のボタンを押すとついたり消えたりする。半数ほどの人はパッドという魔法メモ帳を持っていて、それにメモを取っている。どうやらパッドはペンがなくても指で文字が書け、次々と新しい紙が現れ、無限にメモできるようだ。それを与えてもらえれば、フレイヤも藁半紙の残りを気にすることなくメモが取れるだろう。

シャワは気持ちがいい。心地よい温かさの湯が雨のように壁から降ってくる。ヌルッとした液状の石鹸を体にこすりつければ、ついた汚れをすべて洗い流せた気分になる。

フレイヤは体中に液体石鹸を塗っていった。首筋、肩、腕、足、脇、乳房、そして無毛になった股。

商人の妾となったときは、すでにうっすらとした陰毛が生えていた。成長しても生い茂るほどにはならなかったが、柔らかい毛が股を覆っていた。それが今ではミヅキの命ですべての陰毛が抜かれ子供のようにつるつるだ。

フレイヤはそっと股をなでた。

ぴくっ。

股の中が熱くなってくる。

最後に性行為をしたのはいつだっただろうか。闘士は毎日のようにフレイヤを求めた。一日に二度三度と求められることも珍しくなかった。それが性奴隷としてのフレイヤの生活だった。

その闘士はもういない。フレイヤがここに来て十四日になる。その間、性行為はしていない。

じゅんっ。

フレイヤの手は股を触り続けている。

フレイヤ自身は自分が性欲が強いとは思っていない。だが、いつもこの時期、生理の数日前になると、気が高ぶり敏感になるのことは気付いていた。

フレイヤはさらにヌルッとした液体石鹸を体に塗っていった。乳首、内腿、外陰と。

翌十五日目。その日は朝から雨だった。いつものシトシトと降る雨ではなく、しっかりとした雨で風も強い。そのため、農作業は中止となり、朝から服作りの総括が始まった。

「人によっていろんな分類はあるけど、私は物作りの工程を四つに分けてるの」

農作業がなかったので、昼過ぎには総括も終わりになっていた。そこでミヅキが物作り一般について話し出した。

第一工程、採取。綿花や虫の繭を拾う。第二工程、素材作成。綿や繭から糸や布を作る。第三工程、服作り。布を縫い合わせて服を作る。第四工程、調整や染色。使う人に合わせて裾丈を直す。糸や布を染色する。

「最初に服作りにしたのは失敗だったかな。第四工程が判りにくいよね。要はなくてもいいけど、ないよりかあったほうがいいっていう工程なんだけど。服なんか白くてもいいでしょ。でも色がついてたり模様があったほうがより楽しいよね。微調整をしなくても着られるけど調整したほうが体にフィットして着心地がいいでしょ」

確かにそうだ。装飾がなくても暖はとれるが、派手な装飾は着ている人の美しさを増す効果がある。

外で人と会うとき、闘士からは派手な服を着るよう言いつかっていた。それは自分の所有物をよりよく見せるための手段だ。だが、屋敷の中で過ごすときは夏でも冬でも貫頭衣だった。

冬の寒さに耐えかね、ズボンとセーターを着こんでいたら、闘士に『そんなもん着ていたら、すぐに突っ込めないだろうが』と腹を殴られた。闘士にとってフレイヤは見栄えのいいアクセサリーであり、性的欲求を満足させる道具でしかなかったのだ。

その闘士はもういない。フレイヤが着飾ることも性行為をすることもなくなった。

否。性行為は今後もあるはずだ。フレイヤは今、娼婦になるための教育を受けているのだ。自身の性欲のはけ口は残されている。それが使えるのはいつのことだろうか。

どんっ。

「痛っ」

シライシシヅカが机の上に置いていたフレイヤの手を殴りつけた。

「聞いていますか」

その場のみな、シライシシヅカ、ピイナ、ジュンコ、ジェスター、そしてミヅキがフレイヤを見ている。

「美月様が尋ねているのですっ。何故答えないのですかっ」

ジェスターが睨みながら問い詰める。

「え、あん、あの。その。えっ、あの。聞いていませんでした。考え事をしていました」

「私の話は退屈だった?」

「え、あの。そうではありません。服の調整の意味と効果を考えていました」

これは嘘にはならない。そのはずだ。フレイヤは窺うようにミヅキを見た。
ミヅキは舐めるようにフレイヤを見回し、そしてニヤリと笑った。
「フレイヤも物を考えるようになったんだね。みんなの教育の成果かな。じゃあ、何を考えていたのか聞かせて」
「え、ええと。調整や装飾は着ている人をより美しく見せます。美しさはそれだけで価値があると思います。なので、調整や装飾は大事だと考えました」
ミヅキのニヤリの口角がやや下がり、感心したように二三度小さくうなづいた。
「そんなこと考えていたんだ。他には？　他にも何か考えていたよね」
ミヅキの口角は元のニヤリの位置に戻っていた。他に頭に浮かんでいたのは、闘士に犯されている自分の姿だ。そのことを言う訳にはいかない。だが、嘘をつく訳にもいかない。
「あ、あの。私は男の相手をさせられると聞いています。それはいつですか。その訓練はしなくていいのですか」
「ふうん。そんなこと考えていたんだ」
ミヅキの口角はさらに上がった。その顔は獲物を見つけた捕食者の顔に見えた。
「私のつまんない話を聞くより、そういう訓練をしたいんだ」
「え、あ、あの。そういう。あ、あのミヅキサマの話はためになります。つまらなくはないです」
「そういうおべっかは使わなくていいから」
「お世辞ではありません。ミヅキサマは嘘がお嫌いですから、嘘は言いません」
「あはははは」
よほど嬉しかったのだろう。ミヅキが突然声を上げて笑い出した。
「ジェスター、締めて」
ミヅキは笑いながらそうインプに命じた。

「ちょっと教育課程見直すよ。次は何を予定してたの」
「武器作成の予定です」
ジェスターの嫌みの締めが終わるとミヅキが尋ね、シライシシヅカがその問いに即答する。
「そっか。それ、武器と防具を一緒くたにやっちゃって。それと護符作りはやんなくていいや。あれは魔法の知識がないとちんぷんかんぷんだから。スキル二つ減らしたから十日間空くよね。その分は私の手伝いと脳筋の資産回収に使うから」
「オッチャにもそう伝えます」
「じゃ、今日は一旦ここまで。ジェスターはこの後何か予定ある？　なければ私の代理としてロデムーと一緒に御屋形様のところで来年の大会の件、話してきて欲しいんだけど」
「ご自分の仕事を私に押し付けるのですかっ」

「一年かけてやろうと思ってたことを百日でやらなきゃいけなくなったのはジェスターのせいなんだから協力してよね」
「仕方ありませんねっ。では御屋形様の部屋へ行ってきますっ」
ジェスターの姿がパッと消えた。ここの人の何人かは空間系のアーティファクトを持っているらしく、自在に空間移動ができるようで、突如現れたり消えたりする。個人で古代のアーティファクトを所持できるとはどれだけの金持ちなのだろうか。
ジェスターの退出を見てシライシシヅカが奥の扉に向かって移動する。おそらくお茶の用意をするのだろう。それくらいのパターンはフレイヤにも読み取れるようになっていた。
「一服しようか」
やはりそうだ。
「今日はティー・ロワイヤルにして」
銘柄を指定されるのは珍しいことではない。セイロン、ダージリン、ウェールズの王子。ミヅキは時折指定している。その際もシライシシヅカは足を止めることなく扉の前でお辞儀をするだけだ。そのシライシシヅカの足が止まった。
「ティー・ロワイヤルですか」
「そ」
「すみません。ティー・ロワイヤルは存じません」
「ほら、角砂糖にブランデー浸して紅茶にいれるやつ。専用のスプーンがあったでしょ」
シライシシヅカは何かを考えるように目を動かすが、すぐに頭を下げる。
「申し訳ございません。存じません」
「あれ？　レシピになかったっけ」
ミヅキが左のこめかみを叩く。あれは何かを考えているときのミヅキの癖だ。
「そっか。ティー・ロワイヤルはカフェ・ロワイヤルのアレンジレシピなんだ。じゃ、私が作るよ。奥でみんなで一休みしよ。紅茶は五人前でいいよね」
ミヅキは立ち上がり同意を求めるように見回した。
「私は先ほど教育用に作っていた服の仕上げをします」
「そう。じゃあ四人ね」
ミヅキは奥の部屋に向かった。シライシシヅカが扉を開けてミヅキを通す。そして、フレイヤとビイナとシライシシヅカがその後に続いた。
奥の控室は窓が小さく、執務室に比べると昼間でもやや薄暗い。中央にカウンターキッチンがあり、背後の壁には各種の茶葉やコーヒーと呼ばれる豆、各種の酒の瓶、塩や砂糖、調味料が収められた棚がある。横の棚にはカップや皿などの器が収まっている。
「カップはいつものじゃなくて、ロイヤルコペンハーゲンにして」
「かしこまりました」
「およ。豪華だね」
「たまにはね。あ、そうだ。ぴぃな、もうちょっと部屋暗くして」

「はあい」
そんな会話をしながら、ミヅキは先に突起がついた変わった形のスプーンと立方体の砂糖、酒が入っていると思われる瓶、ティーポットと茶葉を入れた容器を並べている。そして、ぶつぶつとなにかつぶやくと卓上かまどに火を入れ、湯を沸かし始めた。
湯を沸かしている間にポットとシライシシヅカから受け取ったカップをシンクの中に置いている。湯が沸くとポットとカップに湯を入れしばらく置いた後、捨てる。木のスプーンでポットに茶葉を入れ、さらに湯を入れる。そして湯の中の葉の動きをじっと見ている。しばらく置いたの後、茶漉しを使いながら茶を四つのカップに均等に注いでいく。最後の一滴まで注ぐとカップを各人の前に置く。そしてカップに橋を渡すようにスプーンを置いていく。先端の突起がピタッと縁にはまりスプーンは安定する。そこに立方体の砂糖を一つづつ置く。砂糖の上から瓶の酒を垂らす。酒が砂糖に沁み込み形が崩れる。スプーンで受け止めきれなかった酒がポタポタとカップの中に落ちる。
ほのかな香りが部屋の中にたちこめる。スプーンの上でミヅキが親指と人差し指をこする。
すると、小さくボッと音がして砂糖が青い炎に包まれた。
四つのスプーンの上で指をこすり、四つの砂糖に青い炎が灯る。
「うわお、エンターテイメントだね」
ピイナが感嘆の声を上げる。綺麗だ。そこには幻想的な美しさがある。
「あとは混ぜて飲んで。ゆっくりスプーンを入れると一瞬、お茶の上で青い炎が揺らいで面白いよ。一瞬だし、青が薄くて判りにくいかもしれないけどね」
ミヅキはそう言って自分の前のカップで実演して見せた。フレイヤもそれにならってみる。青の炎はひととき茶の上で踊り、そして消えていった。
そのお茶は今までに味わったことのない味と香りだった。一口飲むとフワフワとした気分になり心が安らかになっていく。
ふう。
フレイヤは無意識の内に大きく息を吐いていた。
肩から力が抜けていくのが判る。自分では意識していなかったが、この十五日間ずっと緊張して肩を張って生活していたのだろう。
「ふう。おいしい」
肩を下ろして、フレイヤはそっと囁いた。ロイヤルコペンハーゲンと呼ばれたカップは普段使いのものと比べてかなり薄手にできている。持ち手も薄く、小さな装飾がなされていた。カップの外側には紺色で緻密な草花が描かれている。いかにも高級そうなカップだ。
「あげないよ」
カップに見とれていたフレイヤにミヅキの声がかかる。
「本物のロイヤルコペンハーゲンじゃなくて、それに似せて作った偽物だけど、それでもそれなりのものだからね、それ。持ってる中でもかなりの上級品だから」

「い、いえ。欲しい訳ではありません」
フレイヤは慌てて否定し、ミヅキを見た。そこにはニヤリと笑いながらフレイヤを見ているいつものミヅキの顔があった。
「飾りは物の価値を上げるってフレイヤは言ったよね。私もそう思う」
ミヅキはフレイヤの目を見ながら淡々と話し始めた。その口調はいつもより優しく感じられた。
紅茶、ブランデー、角砂糖。混ぜ終わったものを出されても、混ぜるまでを見せたものを出されても、味や香りに違いは出ない。だが、工程を見せれば、より味わい深く感じてしまう。器まで高級であればなおさらだ。
「だからね、調整とか装飾は大事なんだよ」
フレイヤはポケットからメモ帳を取り出し『調整、装飾は価値を上げる』と書き綴った。ミヅキはそれを見てニヤリと笑いながらロイヤルコペンハーゲンの偽物に口を付け、一口飲んだ。
「で、本当は何を考えてたの？　さっき。もうジェスターはいないから正直に言ってみなよ」
フレイヤの肩がまた強張った。さっき考えていたことは闘士に犯されている自分の姿だ。何と答えるのが正解なのだろうか。フレイヤの目は答えを求めてさまよった。
「ここには女しかいないんだから、恥ずかしがってないで正直に言っちゃいなよ」
ミヅキが畳みかける。フレイヤは小さく息を吐いた。
「私がここに来て十五日になります。その間。ええと。その間、男の人と性行為をしていません」
フレイヤは周りを見回した。ミヅキは同じニヤリのままだ。シライシシヅカもジュンコも『だから？』と言った顔で見ている。フレイヤは消え入りそうな小さな声で続けた。
「性的欲求を解消するために、だ、誰かと、せ、せ、性行為をしたいです」
「誰とセックスしたいの？」
性行為をしたいとは思っていた。だが誰としたいかは考えていなかった。『考えろ』とあれだけ言われてメモにも書いているのに何も考えていなかったのだ。
「ここでは作業をしていて手に負えないことがあると、周りの人が自発的に手伝ってくれます。もし、性行為をしたくても相手がいなくて困っている人がいれば、私がお手伝いします」
「落第点」
ミヅキがすかさず評価を下す。どう答えれば合格点になるのだろう。
「あんたは最初に言ったよね。誰とでも寝るのは低級の売女だって。今言ったことはそれ以下だよ。売女はちゃんと金銭を受け取るからね。あんたは無償でヤるんだよね。それに、今の言い方あんたは困ってないけど、困ってるのがいたら助けてやるっていう意味だよね。それ、違うでしょ。困っているのはあんたの方。あんたがセックスしたくてたまらないだけだよね」
ミヅキの言うとおりだ。反論の余地はない。

「もう一度聞くよ。誰としたいの」
うずきを押さえられるなら誰でもいい。でも欲を言えば優しい人がいい。殴られるのは嫌だ。だからジェスターは論外だ。強く叱責されたり手を切り刻まれながら性行為はしたくない。優しい男は誰だろう。優しそうなのはバイシャジャとロデムーか。バイシャジャは紳士だが年がかなり上に見える。ロデムーは男前だし、親身になって忠告を与えてくれたりしている。
「ロデムーサンです」
シライシシヅカが息をのむ音が聞こえた。見るといつも冷淡なシライシシヅカが目を丸くしている。隣のピイナも同様だ。
「チャレンジャーだね。あ、いや、フレイヤは性奴隷だったっけ。それだけのテクを持ってるってことなの？　私、フレイヤのこと過小評価してたかな」
ミヅキが感心したように首を振っている。
「何かおかしいこと言いましたか」
「いやあ、私だって闇面での一番のテクニシャンはロデムーだと思ってるよ。セックスしたらどれだけ気持ちいいだろうって想像はするけど、実際にしたいとは思わないよ。まだ廃人にはなりたくないからね」
「それほどロデムーサンは危険ですか」
優しそうに見えたロデムーはとんでもない性癖を持っていたようだ。
「ま、フレイヤが誰を好きになって誰とセックスしようとも私は止めないよ。ただね、ギルメン以外とするのは研修後にして。あんたはまだ闇面の関係者として外に出すには、礼節が足りないから」
ギルメンとは闇面に所属する者たちのことだ。名前を知らない『御屋形様』とミヅキと『サン』を付けるべき人たちの総称だ。
「あ、ハイ。判りました」
今のミヅキの発言は相手がギルメンであればだれとでも性行為をしていいという許可なのだろうか。
「フレイヤは思った以上によくやっていると思います。ですから私から褒美を与えます」
ミヅキの真意を尋ねようとしたとき、シライシシヅカがそれを遮るように話しかけてきた。今までシライシシヅカは見下したように見るだけで評価してもらえているとは思っていなかった。それなのに褒美をくれるという。フレイヤは驚きでシライシシヅカを見た。
「褒美として、ロデムーとの性交を禁じます。今日以降八十五日間はロデムーと性交してはいけません。その指示に逆らうようなしぐさがあれば、死んだほうがましと思うような罰を与えます」
フレイヤはシライシシヅカの言葉が理解できなかった。もらえるのは褒美ではなかったのか。どう取っても今の発言は褒美ではなく罰だろう。
「白石支津香のご褒美は判りにくいのが多いけど、今のは判りやすいご褒美だね」
ピイナもそう言いながら笑っている。判らない。彼女らにとって褒美とは罰なのだろうか。

「今のは褒美ですか。罰ではないのですか」
「明らかにご褒美でしょ。判んない？　あんたは本当に何も知らないし、なにも判んないんだね。ま、いっや。サービスで教えてあげる。白石支津香はあんたが壊れないように忠告してるんだよ。ロデムーとセックスしたら気持ちよすぎて死ぬかもしれないから。それで済めばいいけどね。あんたは人間種でしょ。下手をすると人間種をやめることになるからね」
ロデムーと性行為をすると死ぬか人間種でなくなるらしい。人間種でなくなるとはどういうことか。亜人種や魔物種、もしくは獣になってしまうのだろうか。種は生まれつきだ。生まれてから死ぬまで種が変わることはない。それなのに、ロデムーとの性行為は最悪、人間種でなくなるという。それは魔法によって姿かたちを変えられてしまうということなのか。
ピイナは言った。「死で済めばいいが、下手をすると人間種ではなくなる」と。とすれば種の変化は死よりも上位なのだ。死んだ後に人間種ではなくなる。それはアンデッドと化すということだろう。
「ロデムーサンはネクロマンサーなのですか」
「違う違う。これだけ言ってまだ判んないの？　だからちょっとは考えなって」
ピイナはあきれたようにそう言うが、今の問いは考えた末の問いだ。死人をアンデッドにするのはネクロマンサーの秘術だ。
「今のはぴぃなもいけないよ。考えてなかったら今の質問にはならないでしょ。ここの人たちにとって最上位の不幸は『死』なんだから、『その上、人間種をやめる』って言えば、アンデッドってなるでしょ。ね、そう思ったんだよね。ま、アンデッドが出てくるあたり、その程度の考えしかできないってことだけどね」
ミヅキが助けにならない助けを出す。
「あ、ハイ、そうです」
「ぴぃなの言いたいことはね、そういうんじゃなくて、うんと。ううん。フレイヤは薄弱系の気違いを見たことない？　何も考えずにヘラヘラ笑っているだけの存在。感情の限界を超えると、そんな風になっちゃう人いるでしょ。人間をやめるっていうのは、そういう人間としての知性と尊厳をなくして、獣のように生きてる人の例え」
見たことある。あれは二年前に湖畔の家へ向かっていたときだ。馬車が魔物に襲われ、壊れたために立ち寄った集落での出来事だった。
予定通りに進まず不満を爆発させていた闘士が夕刻に宿代わりの集会所から出ていった。夜になり戻ってきたが、そのまま部屋の隅で寝てしまった。不機嫌なときはフレイヤを殴りながら犯すのが普通だ。犯されなかったフレイヤは安堵しつつ闘士から離れて横になった。
夜半、外が騒がしい。耳をすますと、どうやら娘が一人いなくなったようだ。集落の男衆が総出で探している。集会所の中も確認に来たが、闘士に一瞥され、ちらりと見ただけで立ち去っていった。
朝、職人が夜通しで直した馬車で出立しようとしたとき、その娘は現れた。まだ子供と言っていいくらいのその娘は視線の定まらない目で「アハハハ」

と笑いながら集落の中に入ってきた。下半身は丸出しで、足は擦り傷だらけ。股から血を流している。何が起こったかは明らかだ。何者かによって乱暴されたのだ。人々は「ゴブリンにやられたのか」と囁きあっている。

その娘はフラフラと歩き、闘士にドンッとぶつかった。いつもの闘士なら殴り飛ばすか斬り殺していただろう。だが、そのときの闘士はフンと鼻を鳴らしただけだった。その様子を見てフレイヤは悟った。娘は闘士から気が狂うほどの乱暴を受けながら犯されたのだと。

ピイナは尻に物を突き立てる。ジェスターは手首を切り落とす。ジュンコは下半身を丸出しにさせ羞恥心をあおる。ロデムーは女が狂うまで犯すのだ。ここの者たちはみな異常者だ。人を傷つけることに喜びを感じる異常者の集団なのだ。そんな者たちとの性行為を望むとはなんという浅はかな考えだったのだろうか。

「判りました。よく判りました。シライシシヅカサンの言うとおりにします」

フレイヤはすかさず返事をした、ミヅキは半ばおびえたフレイヤを見てうれしそうにニヤリと笑った。

次の日の夜。ミヅキがフレイヤの部屋にやってきた。手には一度割れてそれを金色の接着剤でつなぎ合わせたロイヤルコペンハーゲンの偽物を携えていた、

「ちゃんとしたのは駄目だけど、直しの鍛練に使った三級品ならあげる」

そう言ってカップを手渡し、フレイヤを抱いた。

十七日目。フレイヤは気もそぞろだった。裏庭での鉱石採掘は失敗の連続で、ピイナから嫌味を言われどおしだった。昼過ぎからの製錬もうまくいかず、教師役のオッチャもうんざりとした顔を隠そうとしなかった。

「性行為って気持ちいいし、幸せな気分になれるよね」

以前そう評したのは誰だったか。そのときのフレイヤにはその感覚が判らず、即座に否定した。絶頂に達したとき興奮するのは否定しない。だが、そこにあるのは気の昂りだけで、幸福感は一切ない。フレイヤにとって性行為とは強要され、獣のように興奮するだけの行為でしかなかったのだ。

だが、それだけでないことを昨晩知った。中には『気持ちいいい』行為もあるのだということを。ミヅキは何故、フレイヤを抱いたのだろう。何故、ミヅキとの性行為は幸せな気分になれるのだろう。

フレイヤの否定への返答は「愛する人との行為だと幸せになれるのよ」だった。

フレイヤはミヅキを愛しているのだろうか。ミヅキがフレイヤを愛しているのだろうか。

そんな思いが無限にループし、作業に身が入らなかったのだ。

「その絵を見せなさい」

それはシライシシヅカと二人並んで行っていた書き取りの練習のときだった。すっと横から手が出てきて、メモ帳が奪われてしまった。放心していた

フレイヤには一瞬何が起こったのか判らなかった。我に返り横を向くと、そこにはメモ帳に描かれたミヅキの似顔絵を見ているシライシシヅカがいた。無意識に手が動き、ミヅキの顔を描いていたのだろう。

「見ないでください。私の絵は見られると人を不幸にしてしまうのです」

フレイヤはメモ帳を取り戻すため、手を伸ばした。シライシシヅカは何か言いたげに口を開いたが、すぐに口をつぐみ、テーブルの上に伏せた状態でメモ帳を返した。フレイヤは手に取るとすかさず一枚めくり白紙のページを上にした。

「美月様はとてもお優しいお方です。周りの皆を愛してくださいます。それを忘れないように。そして勘違いしないようにしてください」

シライシシヅカはそれだけ言うと書き取りの練習に戻った。叱責されるものと思っていたフレイヤは半ば安心し、半ば不安になりながら、まだミヅキの無限ループにとらわれていた。

空間魔法使いは非常に珍しい。国に一人いるかいないかだと聞いたことがある。空間魔法の魔道具も珍しく高価だ。その魔道具をフレイヤは与えられている。

闇面のメンバーに空間魔法を使える者がいるのは間違いない。イグリンが国のどの辺りにあるのか判らないが、王都への移動は一瞬だった。ミヅキとシライシシヅカの間に挟まれて二人と手をつなぎ、一瞬体がふわっとしたら、そこはもう王都の中だったのだ。

転移した先は部屋の中で雰囲気はいつもの執務室と似ていた。「闘士の家に案内して」と言われたが、何を言っているのか判らなかった。その意味が判ったのは屋敷の外に出てからだった。

通りに出て周りを見回すと右手に王城が見える。正面の先には告時の塔がある。そこではじめてここがイグリンではなく王都であることが判ったのだ。

王城と塔の位置から見て、ここは貴族街の外れ、低位の貴族や大店の商人たちが暮らしている区画だろう。闘士の屋敷もこのあたりだ。

さらに周りを見回すと、離れたところに見慣れた建物が見つかった。そして、その建物の角を曲がって二ブロック先の屋敷にミヅキたちを案内したのだった。

王都の屋敷はさほど大きくない。闘士の使っている主寝室、フレイヤの寝室、使われたことのない客間、キッチン、リビングダイニング、小間使いたちの部屋、物置部屋。元は三流貴族の屋敷だったのだが、そうとは思えないほどの狭さだ。

闘士は住むところにあまり頓着しなかった。物欲もないようで、武器以外は物もあまり持っていない。だから狭い家でも気にしなかったのだろう。

フレイヤが空けていた二十日間程で屋敷の中の雰囲気は変わっていた。掃除や食事の支度をしていた小間使いは解雇されたのだろうか、屋敷全体が空き家然とした空気に包まれていた。

何年も暮らした屋敷に久しぶりに戻ってきたのだが、フレイヤになつかし

さはなかった。ただ嫌な思い出がよみがえるだけだ。
屋敷の中に入るとシライシシヅカは隅にたまったほこりを見て掃除を始めた。ミヅキはテーブルや椅子、箪笥などの調度品を見て回っている。フレイヤは自分の部屋として与えられていた小さな部屋に入った。そこにはベッドとクローゼットがあるだけだ。
ベッドはきちんとベッドメイクされていたが、その表面にはうっすらとほこりが積もっている。パンと叩くとそのほこりがもわっと宙に舞った。フレイヤの部屋にある窓は天井近くにある羽目殺しの小さな明かり窓だけだ。舞い上がったほこりは逃げ場を持たずフレイヤにまとわりつく。フレイヤは部屋の扉を全開にした。
二十日前まではこの部屋で闘士のご機嫌をうかがいながら暮らしていた。今は周りの人すべてのご機嫌をうかがいながら暮らしている。以前の仕事は性処理だった。今の仕事は多岐にわたる。雑事一般、農作業、採掘、各種の物作り、世の中にあるすべての仕事をしているような感覚だ。
フレイヤはクローゼットを開けた。中にあるのは三着の貫頭衣と十着ほどの豪華で派手な流行服だ。一方、今着ているのは侍女服。しっかりとした作りで安物ではなさそうだが、質素で見栄えはしない。フレイヤは侍女服の前ボタンを外し、ブラウスをたくし上げた。
腹にあざはない。ここで暮らしていたころは腹や背中、尻にあざが途切れたことはなかった。続いて右手首を見る。そこに切断された形跡はない。
フレイヤは大きく溜息をついた。
薄ら笑いを浮かべながらフレイヤにまたがり犯す闘士。ニヤリと笑いながら周りの者に残虐な行為をさせる片目の女。前と今。どちらが幸せなのだろうか。
「今のほうがまし」
フレイヤは自分に言い聞かすように小さくつぶやいた。
「ここにいたんだ」
たった今頭の中にいたミヅキが、思い描いていた通りのニヤリと笑った顔で部屋の中に入ってきた。その後ろにはロデムーが続いている。ロデムーはいつここに来たのだろう。王都に転移したのはミヅキとシライシシヅカとミユキとフレイヤの四人だったはずだ。
フレイヤは慌ててブラウスのすそを直した。ミヅキは前ボタンを留めているフレイヤとクローゼットに架かった服を交互に見ている。
「それはフレイヤの服？」
「あ、ハイ。ストング様が私に与えてくれた服です」
「じゅん子」
もう一度クローゼットの中を見たミヅキがジュンコを呼びつける。ジュンコもいつ来たのだろう。ロデムーと一緒に来たのだろうか。ジュンコが部屋に入るのを待ってミヅキはクローゼットを指さした。
「この中で、王都で今、流行っているのはどれ？」
「そうですね」
フレイヤは闘士に連れられパーティに出ることがある。その時、それらしい

服装でなければ闘士が笑われることになる。毎年、二、三着は新しい流行服を与えられていた。

「これとこれです」

「じゃあ、フレイヤが一番好きな服は？」

流行服は奇抜なものが多い。容姿から派手好きに思われがちなフレイヤも内心はシンプルなものが好きだった。だが、フレイヤに選択権はない。用意されたものを身にまとうしかないのだ。

「三年以上前の服になりますが、私の好きなものはこれです」

「じゅん子、じゃあ、その三つをレシピ化して。終わったら全部、教会の近くで安く売っぱらうよ」

「はい、かしこまりました」

ジュンコは三着の服をクローゼットから取り出すとベッドの上に並べた。そして、どこからか透明板のパッドを取り出し、服一つ一つにかざしていく。かざし終わるとひっくり返し、背中を上にしてかざす。さらには服を裏返しにしてまたかざしていく。その後はパッドにペンで何かを書き込んでいった。

フレイヤはその様子をじっと見ていた。これらの服は売られてしまうらしい。強い思い入れがある訳ではないが、自分の物だった服が安く売られるのには一抹の淋しさがあった。

「それは高価な服です。売るときは仕立てたところに、それなりの金額で引き取ってもらっていました。安く売るのはもったいないです」

服は年に二、三着あつらえられる。だが、すべてをずっと持っている訳ではない。闘士が気に入らなかったものや、痛んできたもの、流行遅れになったものは仕立て屋に払い戻し、新しい服の代金の一部としていたのだ。

「私たちはお金に困ってないからね」

確かにそうだ。見たこともない魔道具を山のように所有し、空間魔法使いまで召し抱えているギルド闇面にとって古着の代金など取るに足らないものだろう。でも、それなら自分にこのまま与えてくれてもいいのではないか。

「それでしたら、このまま私にいただけないでしょうか」

「それは駄目だね。はした金を受け取るより、もっと実入りを得るために貧民に売るんだから。それにね、私はフレイヤにその服を着てもらいたくないし。あんたは私の性奴隷だよ。筋肉莫迦のじゃなくて。私は自分の奴隷の衣食住ぐらいちゃんと見る。みっともない恰好なんかさせない。あんたはそんな心配なんかしなくていいの。判った？」

いつになく真剣な顔でミヅキが見つめる。フレイヤは「あ、ハイ」と答えるしかなかった。

「もう筋肉莫迦のことは忘れなさい」

そっけない返事が不満だったのか、ミヅキが近寄ってくる。フレイヤは腹に力を入れた。こういうとき、闘士はいつもフレイヤの腹を殴ったのだ。

ぎゅっ。

ミヅキは優しくフレイヤを抱きしめ耳元でささやいた。

「あんたは私の性奴隷だから。昔の男のことなんか忘れちゃいなさい。これ

からは私があんたを幸せにしてあげる」
そして耳を甘噛みした。耳に鼻息が当たる。ゾクゾクとしたものが背筋を駆け上がる。そのとき初めて耳が自分の性感帯であることを知った。
ミヅキは止まらない。人差し指でフレイヤ唇をそっとなぞる。一周目、二周目。二周目の途中で指を口の中につき込まれた。
歯で指を傷つけないように口をすぼめる。指は舌の上で妖しく踊る。唾液が口の中にあふれてくる。背中のゾクゾクが恒常化し、思考を麻痺させていく。フレイヤの舌は指を追い求めるように動いていった。
「あんたは私の物なんだから、私のことだけ、私と闇面のことだけを考えてればいいの。そうすれば私はあんたを気持ちよくさせたげる。あんたを幸せにしてあげる」
ミヅキは指を抜いた。じゅぽっとなまめかしい音がして指は口から出ていった。フレイヤの舌はそれを追いかけ外に出る。ミヅキは唾液で妖しく光った人差し指をねちょりと舐めた。
「今のほうが幸せ」
フレイヤは自分に言い聞かすように頭の中でそうつぶやいた。

「それにしても大したもんは全くないね。何年も国で一番を張ってる男だから、それなりのもん持ってると思ったんだけど。当て外れだったよ」
屋敷の中を見てまわっていたミヅキが同行しているロデムーに愚痴をこぼしている。ロデムーは感情を出さずに同意している。
「価値のあるものでしたら、裏の武器庫にあるかもしれません。ストング様は常々、神剣を三つ持ってると言ってました」
「武器庫なんてあるんだ。どこにあるの？　案内してよ」
ミヅキに請われミヅキとロデムーとミユキを裏庭に案内した。
屋敷は王都の外れにある。区画としては貴族街に位置するのだが、区画のもっとも外れで、東は街壁と接していた。街壁は高い。日陰を避けるため屋敷の東は裏庭として広くとられている。
闘士は乱暴な言動から、周りからはただの荒くれ者で、普段は遊び歩いているだけと思われていた。だが、それだけでないことを一緒に暮らしていたフレイヤは知っている。外で遊び歩くか、フレイヤを犯している以外の闘士は、裏庭で剣をふるっていたのだった。
裏庭は屋敷の建物と比べてもはるかに広かった。そこは四つの区画に分かれていた。建物に近いところは石畳が敷かれている。その先はむき出しの土だが平らに整備されている。その先はデコボコしていて大きな石や岩が無造作に置かれている。一番奥は雑草が生い茂っていた。街壁のあたりは人の背を超えるほどの高さだ。そして背の高い木も三本植わっていた。
その庭のところどころに十字の柱が立っている。柱はどれも人の背丈で、藁がぐるぐる巻きに縛り付けられている。
闘士は十字柱を人に見立て、日々、剣の訓練をしていたのだ。
闘士は訓練の様子を人に見られるのを嫌った。余計なトラブルを避けるためフレイヤは裏庭には近寄らなかった。そのため、闘士がどのような訓練を

しているかは知らない。
武器庫は屋敷の軒先に作られた小屋だ。小間使いの部屋と同じくらいの大きさだが、フレイヤは一度も入ったことはない。そこには多くの剣と防具が収められているはずだ。
「広いね。戦闘鍛練場として使ってた？」
「あ、ハイ」
ミヅキは裏庭を見るなり、そう声を上げた。フレイヤから見れば変な柱が植わっているだけの統一性のない庭なのだが、見る人が見ればちゃんと判るらしい。
ミヅキは庭を歩き始めた。
「武器庫はこちらです」
フレイヤは小屋の前に立って入口を指し示すが、ミヅキはそちらを見ようともせず「ちょっと待って」と言いながら走り始めた。
十字柱の前で一瞬止まり体を沈めてすり抜ける。横向きに走り、石畳の上ででんぐり返る。岩を蹴って、そのままとんぼを切る。とんぼの途中で十字柱の首を足で締め付け、そのまま逆さ吊りになる。逆さのまま柱の腕を取りへし折る。柱からパッと離れ別の十字柱を蹴り飛ばす。
あまりの速さでフレイヤの目にはすべては負いきれなかった。
「なるほど、悪くはないね」
そう言い、ズボンについた藁を落としながらミヅキが戻ってくる。今までは執務室で机仕事をしているミヅキの姿しか見たことがなかった。闇面は古代のアーティファクトを扱う商会だと理解している。その仕事内容からミヅキはそこのトップクラスの文官だと思っていた。だが、今の体の動きは文官の動きではない。闘士に匹敵する動きだった。
「あ、あの。ミヅキサマも闘士様なのですか」
「ん？　私は生産系だよ。ま、ちょっとは戦えるけど戦闘系と比べたら全然だよ」
戦闘は奥が深い。フレイヤから見てすごそうな男を闘士は鼻で嗤い、簡単に斃したりする。逆に弱そうな女に顔をしかめ、その通り苦戦することもあった。ミヅキが一目で鍛練場を見破ったように、見る者が見ればこれほどの動きをするミヅキも穴だらけなのかもしれない。
「よし、武器漁るよ」
ミヅキはフレイヤが開けた扉の中に入り込んだ。
入って右手には足踏み式の石のグラインダーと革のグラインダーがあり、左は小上がりになっている。小上がりとグラインダーの所には大きめの窓があり風が通り抜けるようになっていた。
フレイヤは左右の窓を開けた。
窓の先の壁と正面の壁には一面に剣が飾られていた。壁の下部は棚になっていて、軽鎧や兜、グリーブ、篭手があるが、剣と比べるとその数は多くない。目を引くのは正面の壁の中央にある青い短剣とその上にある粗末な弓だ。青の短剣は青水晶のフックに乗っていて、弓はワイルドボアのものとおぼしき牙の上に乗っている。ミヅキは壁の剣を見て行った。

二つのグラインダーには使い込まれた形跡があった。おそらく闘士が剣の整備に使っていたのだろう。そういう細かい作業をする人には見えなかったが、武器庫に誰かを入れるなどということは絶対にしないはずだから、剣を研いでいたのは闘士自身に他ならない。

ビュッ。

空気を切る音がする。その音と共に部屋の温度が下がった気がした。音がしたほうを見るとミヅキの右手が抜身の青い剣を携えている。青の短剣は刀身も青白い。フレイヤにはそれが冷たく凍る氷のように見えた。

キンッ。

ミヅキがビュッと一振りする。刀身から冷気をまとったもやが放たれる。それを見て納得したのかミヅキが左手に持つ鞘の鯉口に剣の背を当て、さっと引いて鞘に納めた。

左手に剣を持ち、うつむいているミヅキのシルエットは戦いの後の闘神を思わせ、その凛々しい姿にフレイヤはハッと息を飲み込んだ。

「神剣なんて一本もないよ」

闘神が眉をひそめてフレイヤを見る。

「手に持っている剣は違いますか。ストング様は冷気を放つ神剣があると言ってました」

その言葉にミヅキは再び左手の剣を見た。

「これが神剣？　あ、そうか。この国ではエンチャント品も神剣扱いなんだっけ」

神剣は普通の魔法剣とは違う。魔法剣は剣の形をした魔道具だ。魔道具には使用回数制限があって、それを超えると発動しない。一方、神剣はそれ自体が魔法を持っていて、何回発動しても魔法が使えなくなることはない。剣の形をしていなくとも回数制限のない魔道具は神器だろう。

そこでフレイヤはハタと気が付いた。湧水魔道具のシャワや温風魔道具のドライヤは魔道具ではなく神器なのではないか。魔道具は回数制限があるのだ。シャワもドライヤも回数切れになったことはない。火おこしの着火魔道具のように百回以上使える物もあるが、普通は多くて二十回が限度だ。この二十日間、毎日のようにシャワを使っていた。シャワの後にはドライヤも使う。天井のランプは日に何回も灯したり消したりしている。とても回数制限があるとは思えない。制限がないのであれば、それは神器だ。

魔道具は安くはないが個人でも買うことができる。着火魔道具などはそれほど裕福でなくても買えるくらいだ。だが、神器は一般人が持てるものではない。闘士は三本の神剣を持っているが、それは闘士が何年もこのこの国で最強のポジションを維持し続けているからだ。

神剣も神器も国や自治領が持っているものだ。個人で持っているのは闘技会のチャンピオンと代々続く武闘流派の道場主ぐらいだろう。それをミヅキたちはいくつも持ち、当たり前のように使っているのか。異国はそんなにも魔法があふれているのか。神器が一般に使われるほどあるのなら「この国では永続使用ができる程度の魔法剣が神剣扱い」の発言もうなづける。

ミヅキが青い短剣を投げてよこした。突然のことでびっくりして手が出な

い。と、スッと後ろからミユキの手が伸び、それを受け取った。
「どう見る？　それ」
ミユキは鞘を滑らせ、刀身をじっと見る。
「三位の短剣。一位の氷の付加。これが神剣なんだね」
「使う？」
「高く売れるなら売っちゃえば」
カシャンとと刀身を鞘に戻してミヅキに放り返す。ミヅキは剣を壁に戻した。
「神剣はこれと、あのとき持って帰った大太刀。あと、もう一振りあるんだよね。どれ？」
大太刀は闘士が闘技会の決勝、準決勝で使っている剣だ。ミヅキはあおれをもう手に入れているのか。
「ここになければスロコサの家かもしれません。闘技会には大太刀と直刀の神剣を使ってました」
「直刀かあ。遠くから見たことあるよ。あの長剣が神剣だったんだ」
「ハイ。その青の短剣と直刀、大太刀がストング様の持っている神剣です。あ、あの。大太刀はすでにお持ちなのですか」
「お持ちって、あのとき持って帰ったじゃん。あ、もしかして、そのときのことまだ思い出せないの？」
「え、あ、ハイ」
決勝戦の会場に向かった時からイグリンの屋敷で目覚めるまでの記憶はまだない。その間にフレイヤはミヅキと出会い、闘士が死んだらしい。何があったかミヅキに聞いても教えてくれない。ただニヤリと笑うだけだった。
「じゃあここは屋敷ごと全部売っぱらおう。もうちょっと使い心地がよかったら王都の拠点をこっちに移すのもありかなって思ってたんだけど、この狭さじゃちょっとね」
ミユキも「そうだね」とうなづいている。
「あ、あの。広いお屋敷でしたら、あ、あの。バルドル様の別邸が使えるかもしれません」
「何それ」
貴族の第二夫人の惨殺現場はどういう扱いか判らない。だが、それを秘匿しておくのは得策ではないだろう。
「前にストング様がバルドル様の別邸に忍び込んだ強盗を退治したことがあって、そのお礼としてその屋敷をもらったのです。もしかしたらもらったのではなく使っていいと言われただけかもしれませんが」
ミヅキは「バルドル、バルドル」と言いながら左のこめかみを叩いている。
「バルドルって王系の貴族様だよね。王系って言ってもかなりの傍系だけど、さすがに貴族様相手だと、今日乗り込むわけ行かないね。そっちは追って対処かな」
ミヅキは武器庫を出ると大きな声を上げた。
「ロデムー、全部売るよ。あとはジェスターと適当にやって。フレイヤ、明日スロコサ行くからね。そこで神剣ゲットするよ」

帰りは闘士の屋敷から直接イグリンの屋敷に戻ってきた。一緒に戻ってきたのはミヅキとミユキだけだ。二人の間で連行されるように手をつながされたと思ったら、次に瞬間、イグリンの屋敷の裏庭に立っていた。ミユキはすぐにどこかへ行ってしまったが、ミヅキは残ってじっとフレイヤの顔を見ている。そんな状況では、フレイヤは動くことはできない。

「あなたの部屋に行こうか」

しばらく見つめあった後、ミヅキはニヤリと笑い、そう言った。

また抱いてもらえるのだろうか。そんなことを思いながら部屋に入るとミヅキはベッドへドカッと腰を下ろした。

「私の似顔絵、描いて」

そう言ってどこから取り出したのか、真っ白なきれいな紙を渡してくる。何故、似顔絵なのだろうと思わないでもないが、命じられれば従わない訳にはいかない。

「あ、ハイ」

フレイヤは向かい合うように椅子を置き、魔法ペンで描き始めた。

はじめの内はじっとしていたミヅキだが、すぐに飽きてしまったようで、首を動かし周りをじろじろ見始めた。フレイヤが描けるのはポンチ絵だ。写実的な絵ではない。特徴を誇張したりデフォルメしたりするのでモデルがじっとしている必要はない。ミヅキは立ち上がりはしないものの体をよじって後ろを見たり、天井を見たりしてニヤリと笑っている。

似顔絵はすぐに出来た。ミヅキはそれを受け取ると扉に続く廊下の壁にピンを使って貼り付けた。

「明日の夕方から、ちょっと忙しくなってしばらくこっちには来られないから、私がいない間は毎日朝と晩、この絵を私だと思って挨拶して。おはようとおやすみ。あ、それと、いってきますとただいまも。判った？」

ミヅキは外でも仕事をすることがあるのだろうか。ミヅキが働いている姿を見たのは執務室と工房だけだ。工房も紙作りを見ただけで、外で仕事をすることはないのだと思っていた。ただの文官ではなく戦闘もこなせるように、フレイヤがまだ知らない面も数多く持ち合わせているのだろう。

「あ、ハイ。判りました」

ミヅキがいない間は用も減って楽になるかもしれない。フレイヤはポケットからメモ帳を取り出し『朝と晩に絵に向かって挨拶をする』と書きつけた。

「明後日から白石さんたちにこの部屋の様子見てもらうからね。私がいないからって掃除とか手抜きしないように」

ミヅキは見透かしたようにそう言って、羽根のような軽いキスをした。

次の日、朝の農作業は取りやめとなり、その代わりに朝食会直後からスロコサに向かった。王都のときと同じようにミヅキとシライシシヅカに手を取られて、一瞬体がふわっとしたら、そこはもうイグリンの屋敷ではなかった。王都のときとは異なり、すぐにそこがスロコサであることが判ったが、

それは転移先が街の外で街壁の先に闘技場の大きな屋根が見えたからだ。街の外は野が続き、イグリンの外と似ている。フレイヤは首に右手を当て、左手首を見た。そこには青い石が埋め込まれた革の輪が付けられている。青い石は青いまま輝いている。フレイヤはハッとしてミヅキを見た。ミヅキはすでに街門に向かって歩き出している。シライシシヅカはまだフレイヤの後ろに立っている。つながれていた手は転移終了と共に離されていた。

ミヅキは野の先を進む。その距離は人丈三つほど。それが六十になると首と手首と足首の輪が爆発してしまう。爆発の条件はイグリンの外で、ミヅキやシライシシヅカから人丈六十以上離れたときだ。であれば、昨日の王都もイグリンの外だ。あのとき、ミヅキやシライシシヅカから離れてしまっていたら、爆発していたのだ。

フレイヤは青い顔でミヅキを追いかけ、すぐ後ろについた。シライシシヅカも歩き出し、ミヅキのすぐ右横に並ぶ。ミヅキの左はミユキ、右はシライシシヅカ、後ろがフレイヤ。安全なのはミヅキとシライシシヅカの間だ。シライシシヅカが大きな石を避けるためちょっと右にずれた瞬間、フレイヤはミヅキとシライシシヅカの間に割り込んだ。

安心から息を吐こうとしたとき、さらなる不安に行き着いた。ミヅキたちは空間魔法のアーティファクトを持っている。このままフレイヤを残しどこかへ転移することも可能だ。そうなるとフレイヤはここで一人ぼっちだ。

昨日といい、今日といい、転移の前には手をつないだ。手をつないでいれば突然転移されても一緒に転移できるだろう。

フレイヤはすぐ横のミヅキの右手に触れた。ピクッと手を縮こませたミヅキだが、それがフレイヤの伸ばした手であることが判ると力強く握り返し、楽しそうにニヤリと笑った。

ミヅキの手は大きかった。そして堅かった。

フレイヤの父親の手も大きくて堅かった。母の手は大きくはなかったが堅く、寒い季節はあかぎれていた。手が堅いのはいつも鍬や鎌を持ち、野良仕事をしていたからだ。凍るような冷たい水で炊事や洗濯をしていたからだ。

フレイヤの手は白く柔らかい。父や母はその手をきれいだという。「お前は野良仕事などはせずきれいな手のままでいなさい」そう言って家の手伝いもさせてもらえなかった。性奴隷になってミヅキの所に来るまで一切の手作業はしていない。だから二十日前までは白く柔らかい手のままだった。

確かにその手は自分でも美しいと思う。だが、好きなのは父親のような、ミヅキのような大きくしっかりとして堅い手だ。しっかりと働いている人の手だ。

フレイヤはミヅキと手をつなぎながらスロコサの街門をくぐり、闘士の家へと案内した。

スロコサから戻った直後からミヅキは姿を見せなくなった。ロデムーとミユキもいないことから、三人でどこかに出かけているのだろう。

朝食会はミヅキはなしで行われている。そのため、その場で食事をしているのはフレイヤ一人だ。皆はフレイヤの存在を無視したように会議を進める

が、一人だけ黙々と朝食をとるのはいたたまれない気持ちになる。
ミヅキがいなくなって三日目の夕方に執務室でミヅキに似た雰囲気の女性を見かけた。帰ってきたのかと思い挨拶のため近寄ろうとしたのだが、そばにいたシライシシヅカに「頭を下げて姿を見ないように」ときつく言われてしまった。おそらくはあれが御屋形様なのだろう。ミヅキのようにやや浅黒い肌で黒髪。黒系の服を着たその姿はどことなくミヅキに似ていた。違いは左目に眼帯があるかないかだ。もしかするとミヅキと御屋形様は血縁関係にあるのかもしれない。ギルドのトップの身内なら組織運営の上流を任されていてもおかしくない。
ミヅキの姿が見えなくなった日から、夜になると侍女たちが交替でフレイヤの部屋を訪れていた。
初日はジュンコだった。部屋に入るなり壁のミヅキの似顔絵に向かって頭をさげ、ぶつぶつと何かつぶやいている。その後はざっと部屋を見回して小さくうなづいた。
「私の見る限り、部屋はきれいですね」
「あ、ありがとうございます」
「洗濯した侍女服を見せてください」
言われたとおりにクローゼットの服をベッドの上に置く。ジュンコはそれをじっくりと見ていった。
「鏡を見てください」
鏡の中にはフレイヤを見つめるフレイヤがいる。ジュンコは鏡の横に立った。
「あなたの服と私の服の違いが判りますか」
ジュンコが着ているのは侍女服だ。フレイヤも同じものを着ている。そこに違いはない。ピイナも同じ服を着ている。シライシシヅカも基本は同じだが彼女だけはスカート丈がやたらと短い。
「違いはありません」
フレイヤが答えるとジュンコは首を横に振った。
「ここを見てください」
示されたのは鏡の中の左脇だ。フレイヤは鏡に近づきじっとそこを見た。そして、鏡の中から目を移し、直接自分の服も見た。
「そこに汚れがあるのが見えませんか」
フレイヤは目をこらす。いつの間についたのか確かに小さく薄茶の染みがある。
「それとここです。糸がほつれています」
指し示されたスカートの裾からは一本の糸が飛び出していた。
「こちらの服の左にも汚れがあります。そして背中には丸い染みがあります。それとここにはしわがあります」
ジュンコはベッドの上の服の背中を見せる。言われればその通りなのだが、そこまで小さな汚れやほつれは言われなければ判らない。
「私の服を見てください。そして同じような箇所があれば指摘してください」

ジュンコは直立不動で立っている。フレイヤは周囲を回り検分するがもちろん不具合はない。
「どこもきれいです」
「背中は自分では見ることができません。半日着続けていたのでしわの一つぐらいはあるかと心配していたのですが、安心しました」
ジュンコは顔を伏せ、小さく息を吐いた。が、その顔はすぐに上がった。
「糸のほつれは糸切狭で直せます。服作りはすでに習っているので糸切狭は使えますね。しわはシャワーのときカーテンの向こうにつるすととれます。ドライヤーの風を当てるのも効果的です。左脇の染みは部分手洗いでとれるでしょう。背中の染みは油汚れのようですからあなたが落とすのは難しいかもしれません。私は服飾関係のスキルを持っているので、私なら何とかできます。落ちない染みや穴は私に言ってください。私が何とかします」
ジュンコはじっとフレイヤを見ている。ここまで小さな染みは見逃してしまうと思いながらも「あ、ハイ」とフレイヤは答えた。
「相手がぴぃなであれば何も言いません。ですがあなたには言います。何故だか判りますか」
確かにピイナは着崩した格好をしている。だが『何も言わない』は嘘だ。ジュンコがピイナの着こなしをたしなめている様子は何度も見かけている。
「ピイナサンに苦言を呈しているのは何度か見かけています」
「あれは限度を超えていたからです。この程度であれば何も言いません何故言わないか。それはぴぃながだらしなく適当な性格という設定だからです。だらしない性格なら多少の染みやしわには無頓着なはずです。ですがだらしなくてもぴぃなはメイドです。メイドとして最低限度の品位は持つべきです。それに対してあなたは美しく艶やかです。であればそれを損なうような染み、しわ、糸のほつれを身にまとってはいけません。それらはあなたの価値を下げます」
子供のころからフレイヤはきれいとか可愛いと言われていた。商人に妾として売られたのも、闘士の性奴隷になったのもこの見た目のせいだ。普通の人は美しいと言われれば嬉しいかもしれない。だが、フレイヤにとって美しさは自分を不幸にする要因でしかない。
「私は美しくなりたくありません」
「それでもあなたは美しくならなければいけません。以前あなた自身が言ったように、美しさは価値です。あなたは美月様のものです。あなたが美しくなれば美月様の価値があがるのです。それは美月様のためになります。ひいては闇面のためにもなります」
フレイヤが美しくなるとまわりまわって闇面ギルドの利益になる。そんなのはエルフを踊らせて戦争に勝つようなものだ。
闇面の人たちは女も男もみな美しい。朝食会で見かける女騎士などは息をのんでしまうほどだ。ミヅキやピイナはそこまでではないが、それでもミヅキには野性味のある美しさがあるし、ピイナはどこか憎めない可愛さを持っている。ロデムーもサクマリョウと呼ばれているスリムな男性も、街中を歩けば女性たちは目を輝かせるだろう。美しさは人間だけにとどまらない。

インプのジェスターも妖精種の亜人のオッチャも人間種に近い整った顔立ちをしている。
彼らはみな闇面の価値を高めるために外見を美しく見せているのだろうか。
「ジュンコサンも闇面の価値を上げるために、服のしわに注意しているのですか」
「それは違います。私は目立ちたくないので気を使っているだけです」
ジュンコが目立たないようにしているのは知っている。ジュンコの教えは『目立たず人の役に立つ』だ。そのメモは毎日読み返している。だが、きれいにすると目立たないとはどういうことだろう。きれいになればその分、人の注目を浴びるのではないか。
ジュンコは不審の目を感じ取ったのか話し始めた。
「私はメイドです。あなたは汚い服を着たメイドと一部の隙もないメイドのどちらが気になりますか。糸のほつれが見え隠れする足と折り目のしっかりとした裾のどちらが気になりますか。自分を『見せる』ことが仕事の者であればくたびれた服より華やかなきっちりとした服のほうが目立つでしょう。ですが私はメイドです。影のように立っている限り、薄汚れた服よりこちらのほうが目立ちません。それと。私とぴぃなは外に出ることはありません。もちろん、必要とあらば屋敷の外に出ることはありますが、外の者たちと交流はしません。私やぴぃなが美しくてもそうでなくても、その点において外の者たちが評価することはないのです。私やぴぃなに美しさを求められるのであれば、メイド服をもっと魅力的に見えるデザインに変えます。すくなくとも白石支津香のようにスカート丈を短くします」
確かにジュンコとピイナはあまり外に出ない。見かけるのは屋敷の中か裏庭か工房だ。それに言われるようにより美しく見せる侍女服はいくらでもあるだろう。
ジュンコは一瞬ミヅキの似顔絵に目をやると、今度は幾分ゆっくりとした口調で話し出した。
「私の理想とするメイド像は、陰に徹し決して目立たず、かつ、仕える主人を支えることです。教育係としてあなたをその理想に近づけようとしました。ですが。ですが、美月様に注意されてしまいました。あなたの最終目的はメイドではありません。今行っている教育は目的に達するための第一段階です。私はそこをはき違えていました。あなたは影のように目立たないでいるべきではありません。控えめでいることはときには必要になるでしょうが、基本は美しく艶やかでいるべきです。適切でない指導であなたを混乱させることになってしまいました。ごめんなさい」
ジュンコが深く頭を下げる。プライドが高いジュンコが頭をさげたことに驚き、フレイヤは目を瞠った。ジュンコも屈辱を感じているのだろう、小刻みに足を震わせ顔を赤くして歯を食いしばっている。
ミヅキも余計なことをしてくれる。これでは今後、ジュンコの逆恨みを買ってしまう。
「いえ、ジュンコサンのご指導はいつもありがたく思っています。教えてくれることすべてがためになることで、大変感謝しています」

「あなたは目立たないようにする必要はありません。ですが、相手が何を望んでいるかを察知する力は必要です。その相手がギルドメンバーなら、その望みをかなえるように行動してください。相手がギルドメンバーでなければ、必ずしも望むように行動しなくても構いません。相手の望みを知ったうえで最終的にギルドの利益となるよう行動すべきです。判りましたか」

姿が見えなくなってから五日目は薬作りの総括の日だった。朝から夕方まで薬草摘みから瓶詰までの一連の作業を復習した。夕方、執務室で行われた反省会で、久しぶりにミヅキの姿を見た。

→→→→→2019/1/14←←←←←

フレイヤ：性奴隷

イグリン：拠点の街

スロコサ：闘技場(コロセウム)のある地方都市：三都市の中立地帯

マニリンド商会：フレイヤを所有していたマニの商会

マルヤタ：出向兵♀　マルちゃん

バルドル：第二夫人を殺された上位貴族

人を観察するのは、フレイヤは得意でしょ。

♂

アスク、ヘルモズ、ニョルズ、フレイ、ヘーズ、ビザル、クバシル、ヒュミル、スリュム

♀

エムブリ、ソル、ウルズ、フリッグ、スカジ、フリッグ、グリズ、グンレズ

？

フギン、ムニン